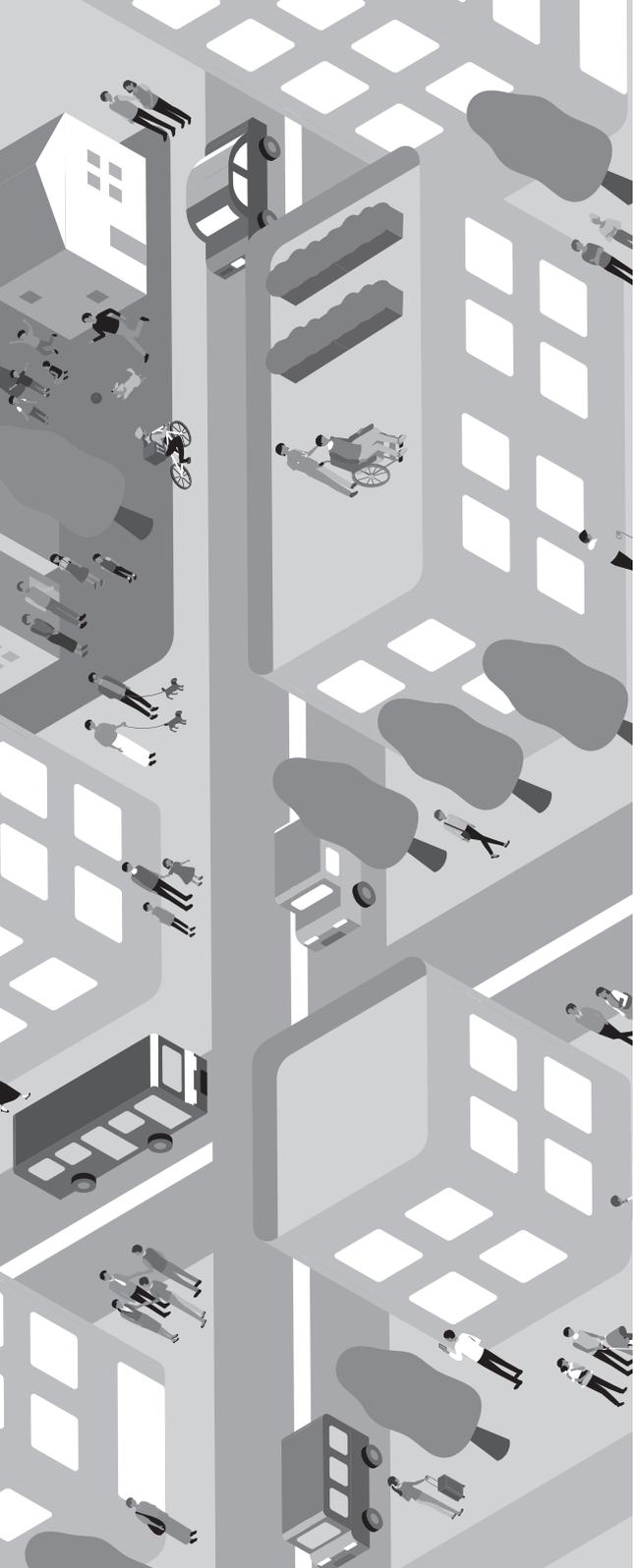


第40回

こうべ市民文芸 入選作品集

令和6年度



第40回

こうべ市民文芸 入選作品集

令和6年度

目次

短歌部門

一 席	艶やかに	大濱義弘	9
二 席	澄みわたる	はなみずき	10
	食卓に	左藤俊弘	10
三 席	うす青き	伯野洋子	11
	避難所で	入間しゆか	11
	秋彼岸	川端美智子	12
	神戸芸術文化会議賞		
	葡萄の汁が	一ノ瀬美郷	12
	震災関連特別賞		
	震災を	寺尾隆志	13
佳作			14
総評			15

俳句部門

一 席 秋空の 升田ヤス子 19

二 席 空になき 中谷明子 20

切干の 荒牧美智子 20

三 席 寒暁の 石崎智紀 21

どの坂を 小中命子 21

ちちろ鳴く 清田しおり 22

神戸芸術文化会議賞 平尾美智男 22

冬菊や 大西月子 23

震災関連特別賞 寒茜 23

佳作 大西月子 24

総評 大西月子 25

川柳部門

一 席 炎の想い 安部美葉 29

二 席 合掌の 石田憲和 30

焼土二度 坪田勝彦 30

詩
部
門

三	席	被災地の 夜更かしを 数多なる 神戸芸術文化会議賞 虚無しきり 震災関連特別賞 語り継ぐ	武田 聡 脇所 陽子 藤本 美知恵 堀口 雅乃 大濱 義弘	31 31 32 32 33
佳	作	34
総	評	35
一	席	おじさん	原田 いづみ	39
二	席	いっしょや ブランコを漕ぐ	後藤 康子 土居 靖子	42 45
三	席	秋の蝶 あつたこと 夏の序章 神戸芸術文化会議賞 むつちや嫌	片岡 晃 松生 大輔 長坂 寿美子 岸本 海月	48 51 54 56

震災関連特別賞

三十年

ごとう ますを

佳作
総評

.....

62 59

短編・エッセイ部門

一 席 夜明け前

北川 晴茂

77

二 席 ハルオとトンボ

佐々木 恵美

81

.....

.....

85

三 席 みどりの芝生

吉田 ちず子

89

.....

.....

93

.....

.....

97

神戸芸術文化会議賞

元町商店街を歩く朝八時

財部 香織

101

震災関連特別賞

災害時ペットと一緒に避難を

橋本 まさ子

104

佳作
総評

.....

107

総評

.....

120

短
歌
部
門

審査員

選評・総評

中川 昭

黒崎 由起子

艶やかに咲く百日紅あの日母を紅蓮の炎呑み込みし跡

大濱 義弘

選評

黒崎 由起子

この一首から、二つの紅が浮かびあがる。震災当日、母を呑み込んだ火災の災と、復興を果たした街角に咲く百日紅の紅。この二つの情景の、時は違っても場所は同じであるという事実の重みが胸を打つ。何年月日を重ねようと、その跡がいかに整地されようと作者の無念の思いが消えることはない。空に朱の花を咲かせる百日紅の木が、まるで母の墓標のように立つ姿は衝撃的であった。

二
席

澄みわたる青空見上げ風を待つ白木蓮は飛翔のかたち

はなみずき

選評

早春のひんやりとした空に、真つ白な花を数多く咲かせる白木蓮。庭や街の街路樹として愛されている花である。作者はその大きな花びらが空に向かって咲く様子を、風を待つ姿と捉えることで、花の一輪一輪の命をクローズアップして見せた。澄みわたる空の青を背景に花の白が輝いている。春を迎え、新しい世界へ「飛翔」する者たちへの、エールのような清新な世界が広がっている。

黒崎 由起子

食卓に夜勤を終えた娘の細い「いただきます」が朝を揺らせり

左藤 俊弘

選評

一夜の勤務を終えて帰宅した娘を迎える母の姿が浮かびあがる。母の用意した朝食に「いただきます」と応えた娘の声の細さに、娘の疲労を感じ取った母である。「朝をゆらせり」との表現には、その細い声を気遣う母の心の揺らぎが秘められているようだ。しんとした朝の気配が伝わる。いかに成長しようと子どもを思い、その日々が安らかであって欲しいと願う母の心が貴い。母の思いに支えられ、また新しい力を得られる娘であろう。

黒崎 由起子

三
席

うす青きアガパンサスの咲き初めて父のゐた夏頭ちあがりくる

伯野 洋子

選評

涼やかな青い花を球状に咲かせるアガパンサス、真っ直ぐに立つその姿は優しくもまた力強い。その花が咲く季節に亡き父を思う作者であるう。うす青いアガパンサスの光を透してみるかのように父と過ごした夏の美しさが視覚化されている。簡潔な表現が魅力的な一首となった。

黒崎 由起子

避難所で遊んだ記憶だけがある私が生きて今があること

入間 しゆか

選評

幼い頃の記憶のなかの「避難所」は「遊んだだけ」の場所だった作者が、成長するにつれ「避難所」が突然の震災で、自宅が崩壊し傷ついた人々が逃れてきた場所であったことを知るようになる。結句の「私が生きて、今があること」には、震災を経験した人々が助け合い立ち上がり復興された「今」を認識し、その地に育まれ生かされている感謝の思いが込められている。一首のなかに確かに息づく年月がある。

黒崎 由起子

秋彼岸縁者きたりてつくづく昔のままねとなみだぐみたり

川端 美智子

選評

初句の「秋彼岸」が、読者を涼やかな秋晴れの日へと連れて行ってくれる。亡き人を忍び、祖先を供養し集まる縁者たち。久しく出逢わなかったこの世の者たちの和やかな語らいのひとつときである。会えなかった時間など飛び越え、昔のままの思いが戻ってくる。こんな柔らかな優しい時間のなかには、懐かしい亡き人の微笑みもが寄せられているのではないだろうか。心温まる一首となった。

神戸芸術文化会議賞

葡萄の汁がシャツにこぼれてむらさきの空どこまでもひとりであった

一ノ瀬 美郷

選評

真つ白なシャツに零れた葡萄の汁のむらさきから、作者は空に広がる夕暮れを連想されたのだろう。そしてその滲む「むらさき」から憂愁を、また孤独を浮かびあがらせ、広がる空間の虚しさを捉えられた。「どこまでもひとりであった」の独白が淋しい。また、この一首から、豊かに香る葡萄の房のひとつひとつの実も淋しさの集まりではないかなど、ふと思わされた。葡萄の深いむらさきを独自の感覚で表現された。

黒崎 由起子

震災関連特別賞

震災を語り合う友今は亡く慰霊碑までも草に埋もる

寺尾隆志

選評

黒崎 由起子

「震災を語り合う友」とは、共に震災を経験し当時の苦労を忌憚なく話せる得がたい友である。が、時が過ぎ街も身の巡りも変化し、友を亡くし、作者に取って失うことの多い年月だったのかもしれない。この一首から共感という言葉が浮かぶ。どんなに言葉を尽くしても経験した者にしか思いを分かってもらえない寂しさが漂う。世話をする人もなく草に埋もれる慰霊碑が、過ぎゆく「時」の象徴として残される。

佳作

大クレイン今夜は月に届きそうそうだかぐやに手紙を出そう

宮本 緑

空いろも雲のかたちもやわらぎて木々の葉尖に舞い降りる秋

大塚 智子

くつくつと鶏ガラを煮てスープとりふかく息して善人になる

山根 洋子

怖かった震災の記憶伝えよう私たちがこそが未来へ繋ぐ

南山 凜奈

満開の桜に心を奪われず瓦礫の中を歩いていた春

平岡 真由美

総評

中川 昭

一席に選んだ一首は、残酷に哀れである。それだけに一首にこめた思いの深さが切実に表現された。他の作品も語調が程良く表現されていて好感が持てる。

総評

黒崎 由起子

こうべ市民文芸に寄せられた三百二十三首には、今を生きる人々の心の風景が真摯に表現されていた。三十一音という小さな器に籠められていたのは、移り変わる自然の美しさを背景にした自身の喜びや哀しみ・家族・友人との絆だった。そして過去へ、未来へと、またある時は異次元の世界にまで自在に翼を広げ、社会の抱える問題などへの関心や感動が伝わる作品も多く見られた。これらの歌々から短歌という短詩型が表現しうる空間の広さを再確認することができたのは私の喜びだった。

今年には阪神淡路大震災から三十年の節目の年であることから、「震災特別賞」が設けられた。応募作品には一月十七日当日に受けた衝撃を、また復興する街で暮らしつつも未だその傷を癒やせない現実、感謝と

ともに立ち上がろうとする思いなどが多く寄せられた。詠うことで立ち上がり、もう一歩前に進もうとする力を感じさせてくれた。また、震災後に育った若い世代や、今まさに青春真っただ中の学生さんたちの、港と坂の街・神戸を愛する思いや、未来へと伸ばされる真つ直ぐな視線は、明日への希望へと繋がりが我々の喜びとなった。「詠うことは自己を見つめること」との思いを新たにしたい、三百二十三首との出会いだっただけだ。

俳
句
部
門

審査員

選評・総評

山田六甲

今井豊

秋空の舟とし漕がむ車椅子

升田 ヤス子

選評

山田 六 甲

車椅子は「百科事典」によると「移動する能力に困難が生じた際に、それらの機能を補う目的で使用される福祉用具」を秋の澄んだ「天空の舟」に見立てて、その空を飛ばせるといふ発想が見事。車椅子の本人かそれを押す家族か入院中の人か看護師かなどの夢想を五七五に呼び込んだ「秋空の舟」との飛躍に感銘。飛ばせてあげたいのか飛びたいのだ。秋の澄んだ上空を・飛んでいるE.Tのような車椅子を想像するだけでも楽しい車椅子を使っている人の発想であろうか。このまま空を自由に飛ぶことができたなら、どんなに楽しいことか、と空想を巡らせているのだろうか。

二
席

空になき地震の傷跡星月夜

中谷明子

選評

今井 豊

三十年前神戸の町は瓦礫と化した。阪神大震災である。地上は瓦礫の山、焼土と化している。しかし、そんな地上から夜空を見上げるといつもと変わらぬ様子。その落差に驚きながらも、復興の志を以て星月夜を見上げる作者。自然の脅威におののきながらも、負けずに立ち向かっていこうとする気持ちが伝わってくる。「地震」は「ない」と読む。

切干の日のかたまりを水に浸く

荒牧美智子

選評

山田六甲

切り干し大根のことで薄く切ったり細く切ったりして乾燥した保存食で冬の季題。

大根はザルや筥むしろに広げて乾燥させる。乾燥のとき太陽の光（恵み）を一杯吸ってうまみも凝縮させる。「日のかたまり」というのが眼目。それを水で戻して調理するが、調理の手間がかかる分だけうまみも増す。

寒暁のひかり波より波間より

石崎智紀

選評

今井 豊

冬の夜明けの光りが海から射してくる。この句が詠まれたのが神戸だとすると、『源氏物語』や『平家物語』の世界、大輪田泊や湊川の戦いなど、さまざまな歴史的な背景も踏まえられている。朝の光が波より射してくると思った次の瞬間、波間からも日が射している。眩しく、魅惑的な朝日の神秘性。「波より波間より」と繰り返される韻律に引き込まれていく。

どの坂を下りても海や大西日

小中命子

選評

山田 六甲

西日は夏七月の季語。真夏の太陽は西に傾いてもなお烈しくじりじりと灼けて暑い。神戸の人はこの句から、思い当たる坂が何処なのだろうと思いを巡らし知っている坂に当てはめる。西日が早く海に沈んでくれないかと思うのは「おくのほそみち」で松尾芭蕉が詠んだ「熱き日を海に入れたり最上川」西日の照り返しにうんざりとしながらもこの町がすきなことから、暑いといつて逃げ出すことを考えない。

ちちろ鳴くはすかい座り二人膳

清田 しおり

選評

山田 六甲

ちちろとはこおろぎのことで秋の初めから晩秋まで鳴く秋の代表的な虫。特にエンマコオロギの鳴き声を聞くと秋を強く感じさせ、過鑑賞だが「きりぎすは／羽で鳴くかよ／蝉や腹で鳴く／わたしや／あなたの胸で。。。」と新土佐節は高知の唄。剛毅木訥のいごつそう男に、しつかり者の、八金女はちきんには、似合わない歌詞のようだが、人恋う季節感の中に「はすかい座り」は物語風。

神戸芸術文化会議賞

冬菊や机に残る地震の疵

平尾 美智男

選評

今井 豊

これも地震の句。学校の教室を思い浮かべたが、個人の机であってもまったく差し支えない。机に三十年前の阪神大震災の疵が残っている。今ではもう黒くなり、疵のところもまるみが付いている。でもまだ、児童生徒が使い続けている。震災当時、この机を使っていた生徒はどうなったのだろうか。生きていたら四十代だろうか。冬菊が匂っている。

震災関連特別賞

寒茜吾子の遺したランドセル

大西 月子

選評

今井 豊

阪神大震災で亡くなった吾子。いまだに捨てられないランドセル。この子が生きていたら、どんな人生を歩んだのだろう。どうしても考えてしまう。親（もしくは両親）は死ぬまでこのランドセルを捨てることはないだろう。吾子の形見としていつも身近に置いておくことだろう。「寒茜」が三十年前の震災を克明に甦らせてくれる。

佳作

惚けても嫌は嫌なり冬堇

巽 惠子

芋虫のひそと魂育てをり

佐藤 英子

ラフランス切る背徳の匂ひして

内藤 京子

寒暁の街に祈りの鐘ひびく

水間 千鶴子

冬の夜私とあなたの距離縮む

西澤 沙羅

総評

山田六甲

もしA Iが応募してきたら、どういう句なのか？と作品群を見ながら考えた。近所のA I研究者Tさんにその疑問を訊いてみたらまだ幼稚な句しか出来ないという。しかしそのような作品とおぼしき句には出会わなかったようだ。俳句は作る人と鑑賞する人とがいて完成するものだから、その人と人の阿吽の呼吸をA Iは出来るのだろうか。A Iの能力もまだまだ人間の生み出した俳句の仕掛けにはかなわないだろう。河合隼雄先生は芸術・文芸は「苦る楽しい」作る苦しみと作れた楽しみが良い作品を生むとよく言われているのを思い出した。

作句に例えると良い句を生む過程には苦しみがある、その結果良い句が詠めると一倍楽しい気持ちになれるというのである。そうするとA Iはおそらく苦しまないで俳句を詠めるのだろうと思うし、苦しんで出来た作品はきつと楽しいに違いないと思う。囲碁や将棋は今、強くなることもほぼ証明できている、そのうち俳句をA Iが作る時代がくるのだろうか。そうすると選句をするのもA Iの時代がそこまできているのかも知れない。いま、俳句結社誌が廃刊するところが増えているから、若い人に俳句を苦しみ楽しんで貰う装置や授業を用意しておかないと。

総評

今井 豊

百三十八人の方から三百八十八句の力作が寄せられた。阪神大震災から三十年と言うこともあって、阪神大震災を詠んだ句や震災を回想した句が多くあり、また秀逸だった。また、若い人からの応募もたくさんあり、これの投句をきっかけに俳句と親しみ、今後俳句を詠んで欲しいと思う。

今回選句をさせて貰って思ったことは、投句されている方々は大きく二つのグループに分けられると言うことだ。一つのグループは、日常的に俳句を詠まれている方である。言葉づかいや言葉選び、季語の使い方や五・七・五の構成など読めばすぐに分かる。もう一つのグループは、この「こうべ市民文芸」に投句をするために、初めて俳句を作った人もしくはそれに近い人のグループである。こちらも読めばすぐに分かる。

この「こうべ市民文芸」で頑張っただけなのは、もちろん後者の人々である。この機会に俳句に興味を持ち、新聞や俳句に投句を始め、俳人として第一歩を踏み出す人々だ。選句の結果は、必ずしも後者の人々が入選している訳ではない。俳句経験者は、やはりそれなりの蓄積を持っており手強い。それでも俳句をはじめようとすると人々の初々しさが勝る場合もある。俳句は奥深いから面白い。

川
柳
部
門

審査員

選評・総評

赤井花城

矢沢和女

炎の想いしたためひらがなの流れ

安部 美葉

選評

赤井 花城

漢字の草書がもともとになって創られた「かな」はかな特有の美しさと力がある。作品からは連綿と流麗なひらがなで綴る人恋いの激しく炎立つ情熱が伝わってきた。そんな文こそ人々は嘗て流麗な毛筆で炎の想いを交わしてきたのだ。今は文化遺産の古文としてしか残らぬ流麗な仮名文字であつても、作者の思いのようにつつも民族の心の中に残って行くことを願わずにはおれない。古今和歌集の歌のように。

二
席

合掌の十指開いてする介護

石田 憲 和

選評

矢沢 和 女

人間の手の所作は不思議なものである。手はその人の心の現れであるかもしれない。

褥りから始まる「介護」に対して鏡のような姿勢である。いつも念頭に置いてこうありたいと願うばかりである。

焼土二度絆つむいでBE KOBE

坪田 勝 彦

選評

赤井 花 城

思えば先の、八十年前の世界大戦における大空襲、加えて三十年前の震度7の阪神淡路大震災、この地は二度にわたる焦土化の大きな苦難を蒙った。作品はその苦難を「人のために力を尽くす」という市民の熱い想いを集めて生まれた発信メッセージ「BE KOBE」に重ねて、市民が市民であることを誇りに思う気持ちに託して、市民同士の強い絆を紡ぎつつ、その大いなる苦難を乗り越えてゆく壮大な想いを謳い上げた。

被災地のそこに変わらぬ桜花

武田 聡

選評

矢沢和女

阪神大震災は今年で三十年になる。先日、震災特集番組で一人息子さんを亡くされたご両親が、弔いに桜の木を植えて毎年その下で、お花見をされているということだった。

その桜はいつまでも春になれば、毎年忘れることなく咲き続ける。震災三十年に相応しい作品になった。

夜更かしを咎めるように雨の音

脇所 陽子

選評

矢沢和女

雨は元来憂鬱なものである。シヨパンの「雨だれ」も静かで趣がある。いわゆる「ピチピチ、チャブチャブ、ランラン」なんてなかなかありえないものである。

雨音からの心の描写が素晴らしい。

数多なる出会い私を光らせる

藤本美知恵

選評

赤井花城

人は生まれてより数限りない人との出会いを重ねながら生きてゆく。出会いなき人生は考えられず、出会いによって自らの人生の輪を広げ成長してゆく。人はまた更にもう一つの大きな出会い、書物によっても自らの個性や知性を培う。この作品の見事さはこれらの出会いが私という一個人の人間を光らせ輝かせるための出会いと捉えたことであろう。人間に、書物に、数多の出会いを賛仰して已まぬ作者の旅路は洋々と果てしない。

神戸芸術文化会議賞

虚無しきり薄紫の刻を呑む

堀口雅乃

選評

矢沢和女

嘗ての神戸の川柳の吐息を感じる作品である。一見難解句のようであるが、決してそうでない。5・7・5とゆっくり鑑賞すれば、伝統的域に入る。上句が常套ではあるが・

震災関連特別賞

語り継ぐ震災生かされた責務

大濱義弘

選評

赤井花城

30年前の1・17のあの日、一瞬にして家屋倒壊、圧死焼死により六、四三四人の命が無念にも奪われた。空前絶後のあの揺れは今も忘れ得ない。「生かされた責務」の重さはその災禍から生き残り生かされた者としての心底からの吐露であろう。三十年の時の経過は都市の街並みを整えはしても、亡き人々の命に代えたその災禍を後世に語り継ぎ備え守る責務を誰が負うのかは誰も知らない。作品はその記憶の風化を戒めて余りであろう。

佳作

逆縁の虚しさ埋める酒五合

佐々木 堯

存えてこそこのいのちの浮き沈み

宇田 恵伊子

倅せだあじさいの街君と住む

鳥ノ 助

はらはらと落ちて命を繋ぐ種

富永 恭子

またあおうもちろんあそこポータタワー

今東 靖人

総評

赤井花城

今回再開されたこうべ市民文芸川柳部門に多数の作品をお寄せいただき、審査員の一人として心から感謝申し上げます。今回の川柳部門では応募者数97名、作品数269点が寄せられた。この度も前回と同じ2名の審査員により審査させていただいた。

その結果として、双方の各賞推薦作品の殆どにおいて一致を見なかったのは自分としては意外であったが、それは取りも直さず両審査員の個性の差であり、また文学観の相違でもありむしろ当然のことでもあった。

ご応募作品は自由詠であり作者の自由豁达な思いの発露による現代川柳作品たる事は論を待たず、最終的には両者による慎重な討議の結果各賞を決定させていただいたのであった。

応募作品の総評として申し上げることは、この年が阪神淡路大震災30年に当たる大きな節目の年であり、やはり圧倒的に大震災関連の作品が多かったのは予期通りでもあった。

その他の作品の傾向としては、温暖化、長寿高齢化への感慨、神戸讃歌等々多岐にわたる作品の数々を拝見できたことは川柳作家として大きな収穫であった。

総評

矢沢和女

今年も「こうべ市民文芸」の企画に感謝します。関係者の皆さまに心からお礼を申しあげます。

長いコロナ禍がおわり、ようやく元の日常に戻ったかに思えるが、決してそうではなかった。時間はコロナ禍でもどんどん過ぎていった。それだけ死に近づいた。川柳人の高齢化、そして文芸に携わる絶対数の減少の反映か、今回は参加数が少なかつたように思えた。しかし、素晴らしい作品群に目を瞠るものがあった。神戸の川柳の特徴としては、誌的川柳と言われ、情緒を重んじる傾向があるが、今回はそういう作品が少なかった。ただ過去に遭遇した句想、いわゆる既視感のある作品が見受けられたのはとても残念である。嘗て、松尾芭蕉は不易流行を提唱した。川柳の基本的なものの上に、まず現代性をもたせた作品を詠っていきたい。また、ドジャースで活躍する大谷翔平さんのお父上の大谷徹氏は「人と同じことをしては、人と同じことにしかならない」とおっしゃったそうである。川柳もやはりひと殺破った個性のある川柳に出会いたいものである。

詩

部

門

審査員

選評・総評

永井ますみ

神尾和寿

一
席

おじさん

原
田
い
づ
み

ワシはのけへん

こっからのけへん

まばらに焼け残った家のひとつに

おじさんは住んでいた

おじさんと 身寄りのない猫たちと

何年も住んでいた

街の復興計画が進み

家はひとつひとつ消えていった

大きなビルが建つのだそうだ

ワシはのけへん

ここは　ワシのうちや

おじさんの家を残して

広い空き地が出来た

おじさんの家のまわりにはフェンスが張られた

まるでおじさんと猫を閉じ込めるように

おじさんは病気で死んだ

すぐに家もフェンスもなくなった

大きな図書館が出来た

おじさんの家のあたりは駐車場

車のとまっていない広い駐車場

猫はどこへ行ったのだろうか

選評

永 井 ますみ

阪神淡路大震災後三十年経って、今年は色々な報道記事や特別イベントが組まれた。街は復興しなければいけない。復興計画の名の元に、住民を右へやり、左へやりする。動かないおじさんの人生を見ている詩人の視線。フェンスで家を取り囲む行政の酷いやり口に反発する。その跡地には図書館が建ったが、おじさんの命を懸けた跡地は、駐車場でしかなかったのだ。しかも／車のとまっていらない広い駐車場／深い空虚感に共鳴する。

二
席

いっしょや

後
藤
康
子

「指の先、曲がってしもうてるなあ」

「髪の毛、綺麗な白髪じゃのうてゴマシオや
なあ」

母が穏やかになった

娘の掌を撫で顔をじつと見る

そして自分の掌をさする

ヘバーデン結節の指 くせ毛でゴマシオ髪

ふたりは まったくいっしょ

母99歳 娘75歳

母の施設に毎月通う娘

車いすに乗る母 腰痛をかばう娘

面会室で向かい合う

白いマスクに覆われた顔

しわの刻まれた口元もいっしょやろう
きつと

「ココハウバステヤマヤ」

「コゲンナトコニオリタクネエ」

「イエニカエリテエ」

「ムスメヤツタラワカッテヤ」

三年前 母が壊れた

こうはなりたくない

でも 母ちゃんの娘やからなあ

こうはならんぞ

子どもに迷惑かけとうない

でも

母と娘って同じ道あるくんやろうか

明日電車に乗って 母に会いに行く

選評

永井 ますみ

老人の人口が順調に増えて、九十代って普通になってきている。我が母も九十九歳で亡くなった。(満ではナント一〇二歳だそうだ)三年前「ココハウバステヤマヤ」と叫んで壊れたかに見えたお母さんも、どうやら自身の老化を認め、我が身と同じに老いて来る娘を見て穏やかになつて来られたようだ。さて私はと詩人は考える「母と娘って同じ道があるくんやろうか」壊れてみたり、穏やかになつてみたり。生活語の詩が生きている。

二
席

ブランコを漕ぐ

土居靖子

座り乗り

脚を曲げ伸ばし

ときに地面を蹴り上げ

ときには背中を押されて

勢い増して調子づく

目の前の公園は平和

ママの手の鳴る方よちよち歩きの子

前向きな鳩は規則正しく

ところ狭しペンペン草

今日という今日

あさっての方向へ頭をよぎる

伐採されたヤマモモの木

ドングリ探しまくる熊

パチパチツドド地鳴り

ギラギラ一見しないペテン師

脇目をふってバランスくずす

おとなだつてブランコ

泣きのナミダ乾かして

行く末は天の助け

空を仰いだら

膝を曲げ伸ばし

立ち漕ぎ

動きを止めたらゼロ地点

いかようにも変われるニュートラル

かりそめ舟を漕ぐ

ゆめゆめ油断するな

アラーム音でリセット

腹をくくる

おへそにチカラ
両の手でにぎる鎖
胸いっぱい風

選評

神尾和寿

遠い昔に夢中になってブランコを漕いでいた頃の感触が、蘇ってきた。開放感や爽快感ばかりではない。不安感もちょっぴり、そして、調子に乗りすぎると、ケガをする怖れもある。けれども、その全体がブランコの魅力なのだろう。
豊かな表現力に感心した。風を切りながら、隅々まで世界が眺められている。これからもここで生きていくのだといった決意をもつて、さあ、もうひと漕ぎだ。

三
席

秋の蝶

片岡 晃

秋の歌がきこえる

私は窓をいっばいに開けた

通りに誰もいなかった

歌声は止んでいた

ランドセルを背負った子がやってきた

やあ 学校へいくの 家に帰るの

彼はつるりとした顔で通り過ぎ

少し先の四つ角を曲がって消えた

つぎにきたのは人ではなく

アサギマダラの一群だった
そのあとを風が追ってきた
鱗粉が舞い私は目を閉じた

四つ角の手前で風が先頭にてた
蝶たちは右往左往したあげく
鈴懸の樹の根の周りに残らず落ちた
風はそのまま立ち去った

また歌がきこえる
鈴懸のかげからさっきの子が現れた
結んでいた手を開いた
色鮮やかな幼虫が休んでいた

選評

神尾和寿

読んでいて、清々しい気持ちになれた。ロマンチックでありながら、くどくない。甘すぎず、口溶けの良いチョコレートのような味わいだ。「歌声」や「風」までも含めて、登場するさまざまなものに、感情移入することができた。

物語風の作品だが、展開が明確だ。そうして、最終行のカタルシスへと自然に導かれる。ところで、「つるりとした顔」という表現は、とても面白いものである。

三
席

あつたこと

松
生
大
輔

その街が瓦解して途方もないいくつもの
夜をやり過ごし いまこの町に生きている
あの日の凄まじい残響を記憶する
脳裏に描写されるのは 途絶えた情報
くり返される公共広告機構のCM
水をくださいと叫ぶ人々 体育館での無遠
慮な人間摩擦 さんざん耳にした小室サウ
ンズ 現実離れたメロディに違和感をお
ぼえた 街が死んだ 純粹にそう感じてし
まった私は悪か その問いを その真意を
どうかきかせておくれよソクローフ！

余波がいくつもの波紋を描き出した途端

次なる一手がスタンバイしていた

早朝列島激震サブウェイ大パニック

オウム返しに言わせておくれよ

言葉さえも無意味に淘汰されるなら

いったいゼンタイどうしろというのか

果ては海 土底に眠るユーモアを掘り起こ

し この世のバッドニュースをいつそ笑い

飛ばしてやろう 揺れる想いにさよならを

晴れた空には祝福を ぬぐう涙に蓋をせず

少しでもいい 全身使ってさらけ出すんだ

枯れた花に一滴の水 こぼれかけのミルク

に黒い渦 図々しいくらいの相互扶助

希望を想うにはまだ早いかもしれない

そっとしておいておくれよ いい歳した大

人の私が自室にこもって何かを書いている

世界は欲望 浴場には裸の群像 灯たやさ

ず過ぎした幾多の日々よ 檻の中のライオ

ンがでつかいあくびを放ったそのとき

ドアの向こうに 一本の長い道が開かれ

その上を軽やかに歩く 人々がいる

「きょうは何があったの?」

「あったことがあっただけよ」

選評

神尾和寿

「自動記述」という表現方法がある。自意識による自己コントロールを排して、心に浮かんでくることを自由に書き連ねていくものだ。本作品からは、そうした手法が思い起こされた。意欲的な試みである。

いわゆる無意識の内こそ、自分自身のこととして本当に経験してきた事実が、埋まっているのかもしれない。そこでは、あの災厄にはどのような意味があったのか、という問いが、今も響き続けている。

三
席

夏の序章

長
坂
寿
美
子

ドブ川のような小川で

罌に掛かっていた

子猫ほどの 灰色ネズミ

罌の底は水に浸かり

囚われのネズミは目を見開いたまま

ピクリとも動かない

時を奪われた黒い瞳に

ぼんやり映っていたのは

流れにそよぐ アメリカザリガニ

仰ぐ空をさへぎる

青いバケツを提げた 子供

木立に止まった カラス

ぱしゃっ と跳ねた

アメリカザリガニ

脇腹をつかまれ

白い空を泳ぐ

十本の足

選評

永井 ますみ

ドブ川のような小川でネズミ捕りに掛かって、死んでしまったネズミの視点でまとめられている詩篇。青いバケツを下げた(生きた)子ども。木立に止まった(生きている)カラス。大川で跳ねて、生きていたのに捕まった(死ぬであろう)アメリカザリガニ。どこでもいつでも繰り返される生と死がさりげなく、死の色濃く展示されている。夏こそが死の季節であると言わんばかりに。

神戸芸術文化会議賞

むっちや嫌

岸
本
海
月

むっちや嫌

関西人が東京に住んだら標準語になるの

むっちや嫌

関西人が話す度に怒ってるって思われるの

むっちや嫌

地域によってエスカレーターが逆なん

むっちや嫌

関東で関西弁で話したら通じへんの

むっちや嫌

関東人がエセ関西弁しゃべってるの

むっちや嫌

ぶつかっても謝らへん人

むっちや嫌

むっちや嫌

選評

永井 ますみ

中学生の頃、お兄さんが大阪で働くとかで、教室で関西弁っぽいしゃべりをする奴がいて、私もむっちゃ嫌だったなあ。山陰の田舎より大阪が良いんかい！って思ったのだろうな。中高生くらいになると、「嫌」で終わることが出来なくて、どうしても中庸を取ろう「嫌」でも仲良くしよう……みたいな終わり方をする事が多いけれど、「むっちゃ嫌」な事に引き込まれて、相づちを打っていて、最後まで嫌だったのが心地よかった。

震災関連特別賞

三十年

あの日からずっと空を見上げている

上昇気流にのって

遠く遠く旅立った君

高ぶる感情を抑えもせず

片付ける事も出来ず

飲み込むことも出来ず

涙を流し続け空に毒突いた

一日一日と日常に戻されてしまう

忘れるという人もいれば

忘れないという人もいる

ごとう
ますを

仕方ないと言う人も

どうしてだと言う人も

人の言葉を拾っても埋められるはずもない

共通なのは誰もが同じように

時間が過ぎてゆくこと

何処にいようと何をしよう

三十年経ち僕の時計は動き続け

ちようど君の二倍生きている

しんどいよ

しんどいけれど君に比べれば：

三十年経ったのかという思いと

三十年は一瞬の出来事という思い

誰かが三十年を背負っている

誰かに背中を押されながら

誰かに守られながら

これからを生きる

そして

今日も僕は空を見上げる

今日も僕は御飯を食べる

今日も僕は生きる

選評

永井 ますみ

震災後三十年「ちよと君の二倍生きている」のだから詩人は六十歳。三十歳の時に震災と遭遇したのだろうか。親友が震災か震災関連の事故で亡くなって、受容する事ができない。いくら空に向かつて毒づいても、年月は容赦しない。誰にでも生きている人には生活がある。日常に流されているようでも、それは誰も同じと認識する事で救われる。詩人は空を見上げることで救われる。そして詩をかくことで更に救われるのだと思う。

佳
作

冬の陽射しのなか

毛
利
和
子

青い空の下の小径

群集のいない広場と鳩の面おも

駅の待合室の遠近

街角の榆の葉擦はずれの音

記憶に残るベンチの影

やがて

自他の境界も曖昧になり

ぼそぼそと

言葉になっっていく

冬の陽射しのなか

わたしという現れは

言葉に触発され

しらしら

白白と

攫み所どころのない

みずいろのたまごを

産み始めた

佳
作

記憶の地図

池
田
邦
子

記憶の地図を広げてみれば
一人の子どもが立ち上る

黒く煤けた高い梁

羽釜のふたから湯気がもれ
子供はかまちに腰かける

芒が揺れて松が鳴り

道祖さんには白い風

松ぼっくりがころげ落ち

池で騒ぐはかいつぶり

光つてのびる廊下には
誰かを待ってるブランコが
しじまの中で止まってる

佳
作絵
本池
水
建
郎

断捨離を免れた絵本 寂し気に

本棚の片隅に横たわって眠っている

幼子を幾度となく

育んでくれた 絵本の数々

ふと 目に留まる一冊に

懐かしい思い出が蘇る

よちよち歩きの幼子が 好きな絵本を

引きずって おねだりが始まる

「これ これ」と

おぼつかない幼児語 溢れ出る

暫く立ち止まり きよろきよろ
様子を伺っている

いつもの膝が 指定席
お喋り交え 読み進む
膝の温もり相まって 眠気誘われ
いつしか 夢うつつ 沈黙が続く

膝椅子 動いて 目を覚まし

「つぎは つぎは」と
せがむ容姿が いじらしい

静かな声で 読み聞かせ やがて
幼子は 夢の中

絵本と並んで お昼寝へ

今 手元の絵本を 読み返えし
遠き日の息吹が 新たに 湧いてくる

早 半世紀 生きてきた幼子ら

とうに 大人の仲間入り

時折の仕種に その息吹 見え隠れ

親子の絆の懸け橋に なっていた絵本

古巣に戻った本棚で 新たな息吹を

包み込み 横になる

やがて 深い眠りに入っていく

ありがとう 数々の絵本に

佳
作

木の葉のお散歩

花
山
富久恵

横断歩道を 一枚の木の葉
立ったまま 風に乗って
青信号を渡ってる

風圧バランス バッチリ
肩フリフリ
シュシュシュ シュシュシュ

こんな木の葉 初めて見たよ

風圧強く でんぐり返り

クルクルクル クルクルクル

こんな木の葉 よく見るよ

そうそう あの木の葉さん

目的地に 無事着いたかな？

佳
作

鍛える

朝起きて、まだねむい

ほほたたけば気合で起きる

頭がさえても体がだるい

建設体操をして体がおきる。

寒さが肌を刺そうとも

白い吐息を吐きながら、

児
玉
陸

片道2キロのさんぽ道

お昼頃には坂をあがり

私はジムにむかいます。

一日基一時間

体をいじめ、体を鍛え

体を鍛える、体を鍛える。

自分の周りはマツチヨだらけ

筋肉まみれのこのジムで

私も一つの筋肉になりたい。

総評

永井 ますみ

久し振りの神戸市民文芸だった。先回が令和二年となつていたので、コロナ禍で一度飛んだ形だろうか。それと、発表形式が壁面展示になると言われている。今迄にない発表形式なので、短歌や俳句と違って文字数が多い分、胸に沁み込んでくれるかどうか、少し不安、広い空間に放たれる言葉たちの佇まいが、少し楽しみと言ったところだ。

作品数は総数で一一六作。この中に高校生から一括で、八七作の投稿があつて新鮮だった。という、一般からは二九作しか参加がなかったわけで、それは残念だった。久し振りだったので、宣伝不足だったのだろうか。

詩を書くキツカケは、自身にとつての大きな事件の時もあるだろう。また、常々心に浮かんでいる事の時もあるだろう。或いは、この高校生たちのように「宿題」だったりしても（本当に宿題だったかは知らないが）同じ事なのだ。「自分の中に向うごめいている何か」を直視することによって、明らかになる何かが、生きていく杖になる事があるのだ。青春のよろげがちな足取りの時に、詩をしつかり掴んで欲しいと思う。

総評

神尾 和寿

何らかの感情や思いを抱きながら、私たちは生きていく。さらに、その感情や思いを誰かに伝えたくもなる。私とは、どこまでも私たちの一員だからだろう。そのようにして生じる言語表現が、詩なのではないだろうか。

目の前の事件ではなくて、いわば心の内容が主題である。なので、情報提供のための道具とは異なる言葉の働きが求められてくる。たとえば、イメージの広がりや語の響きや形象などが、大事になってくる。ただし、そうした効果は、あくまで自然に起こってくるはずのものだ。単に人工的な作品ではない。

今回、たくさん作品を読ませてもらいながら、さまざまな感情や思いに触れることができた。それは、私にとつて喜びであつた。読者となつた私の側からしても、私たちの一員でいたいのだ。

そして、誰にでも、自分の顔がある。残念ながら選外となつてしまったものも含めて、すべての作品に、個性が感じられた。これこそが私だ、ということろまで突き詰めたものだ。本当の自分に出会うことで、新しい世界がひそかに始まるだろう。

短編・エッセイ部門

審査員

選評・総評

西村 恭子

葉山 ほずみ

夜明け前

北川 晴 茂

「もうぼちぼちなあ。来る時期やなあ」

無精髭のはえた顔を少し赤らめながら店長が独り言つ。

「誰が、来るんですか？」

菊正宗酒造の百黙をちびりちびりすりながら、わたしは店長に訊ねる。ここは神戸市長田区にある居酒屋「安寿子」。店名は、95年の震災で他界した店長の奥さんに由来するのだと聞かされていた。

「寅さんや。寅さんが来るんや」

適度に焦げ目がついたホツケの塩焼きを丁寧にはぐしながら、初めて聞く名前に興味を抱いた。その響きから、俳優の渥美清を想像した。ここ長田は確か、あの映画のロケ地にもなっていたはずだ。

「あんだ、まだ寅さんに会ったことないんやっとな

あ。うちに通ってくれるようになってから日が浅いもんナ」

店長は先ほどお猪口に注いだばかりの櫻正宗を一気に飲みほしたあと、無言で幾度となく溜息をついた。何か込み入った事情があるように思えた。けれども、店長の表情からそれ以上聞くのとはばかられた。もう、店じまいの時間ということもあり店内にはほかに客はいなかった。外は雨が降っていて、車のタイヤが水溜りの水を弾く音が妙に大きく響いていた。わたしは話題を少し逸らした。

「寅といえはタイガース、昨年は残念でしたね。甲子園球場の100周年記念をリーグ優勝と日本で飾れませんでしたね」

店長はそうやなと小さくつぶやきながら厨房を出

た。それから店のドアを開けて暖簾を仕舞った。時計を見ると午後11時を過ぎていた。ろれつが回らない口調で店長が、16日にまた来れるかと聞いてきたので、大丈夫ですよと伝えた。勘定を済ませ、壁に掛けてあったコートを羽織った。雨はいつの間にか雪に変わっていた。ボタ雪だったので積もったりはしないだろうが、冷え込みはさらに厳しくなるだろうと思った。



店長との約束の日、少し遠回りして東遊園地に立ち寄った。園内では明日の式典のための準備が進められていた。三宮から電車に乗り新長田駅で降りた。駅から少し歩くと店の赤ちようちんが見えてきた。暖簾をくぐり、それほど広くもない店内を見渡した。見慣れた常連客の中にひとり、知らない男性を見つけた。店長の言っていた「寅さん」だと思った。店長がわたしを今日誘ったのはきつと、この男性に新入りのわたしを紹介したからなのだろうと思った。マフラーを外してコートを脱ぎ、その男性に声をかけた。

「こんばんは」

男性は喪服を着ていた。明日は1月17日、阪神・淡

路大震災で被災した人々にとって特別な日である。

「こんばんは」

しゃがれた声をめいっばい腹の底からかき集めたような発声だった。80歳くらいだと思った。頭髮はすっかり抜け落ち、顔はシワだらけだったが、目つきがとても穏やかだった。寅さんですねと訊ねると、大きく首を縦に振った。そして、おもむろに語り始めた。

「明日、家族の31回忌ですねん。自宅の下敷きになつてしまいましたな。妻も子供らも、みんないっぺんに持っていられましたわ。仕事で夜明け前に家を出とつたワシだけが生き残ってしまいましたな」

自身の身に起きた悲劇を、誰かれ関わらずしゃべつてしまいたい。そうすることで、自身の過去に折り合いをつけたい、そんな人にこの街では何人も会ってきた。だから、寅さんの唐突な語りにも違和感を抱かなかつた。すべてを諦観したかのような作り笑いを浮かべていたが、目頭は真っ赤に充血していた。

「その家はな、地震で全壊した寅さんの自宅はな、この場所にあつたんやで」

店長は今まで見たこともないような険しい顔つき

で床を指差した。

ここは神戸市長田区。あの震災で最も被害の大きかった区域。今でも、ふとしたきっかけで震災直後の風景が脳裏に鮮明に蘇ってくる。倒壊した家屋、隆起し分断された道路、収まらぬ火の手、鳴り止まぬ救急車のサイレン、空を飛び交うヘリコプターの音。あの地震は、平穏な神戸の街から一瞬にして、何もかもを奪い去ってしまった。

寅さんは震災のあと東京に移り、いまも八王子で暮らしているらしい。数年前に腎臓を壊してから、生活保護を受給しながら人工透析を受ける日々を送っているようだ。「安寿子」がオープンして最初の震災の日の前日にふらりと店に現れたという寅さん。店長とはそれ以来の間柄ということになる。

「明日の朝、時間ありませんか？ よろしければ一緒に東遊園地へ行きませんか？」

わたしもあの震災で祖父母と叔母を亡くしていた。あの日のあの時刻ちょうどに黙祷することで用いできると信じ、早朝の東遊園地での式典に毎年参加していた。今年は店長の奥さんと、寅さんのご家族の分まで祈りを捧げようと思った。



翌朝、始発の阪神電車に乗って東遊園地に向かった。こんな早い時間だというのに、車内は人であふれかえていた。その中に、母親に抱かれた幼い子供の姿があった。ふと、その母親はもしかしたら震災以降に生まれた世代なのかもしれないと思った。30年前のあの瞬間を昨日のこのように思い出す人も、教科書で歴史として学ぶ人も、この電車には乗っているのだろう。震災で全てを失った人も、震災後にこの街へやってきた人も、いま、この電車に乗っているのかもしれない。各々がそれぞれの想いを抱いて、電車は神戸三宮駅へ到着した。

店長と寅さんとは神戸阪急の入口で合流した。3人とも朝食をまだ食べていなかったの、コンビニで肉まんと珈琲を買い、バス停のベンチに腰をかけて食べた。それから人の流れに従って歩いた。ただ黙々と、何も話さずに歩いた。辺りはまだ真つ暗で、凍てつくような寒さだった。

「あの日の朝も、寒かったよなあ」

店長が口を開いた。

「そうでしたなあ。とても寒い朝でした」

寅さんが相槌をうった。

東遊園地では手書きのメッセージが書かれた竹の

筒が何千個と並んでいた。蠟燭が筒の中で赤々と燃えていた。

「もうすぐやなあ」

「もうすぐですな」

スピーカーから時報が流れはじめた。5時46分ちよほどを伝えた直後、会場は静寂に包まれた。

『……黙祷……』



式典が終わり、しばらくすると東の空が白みだした。そろそろ夜が明けるのだ。寅さんは吹っ切れたような晴れやかな表情で、陽が昇るほうを見ながら言った。

「実はね、今日を最後に人工透析をおしまいにしよう決めておったんです。なんやかんやで生きていくのに疲れましたね。でも、さっきね、黙祷しているときにね、妻や子供らの声が空から聞こえてきたんです。父ちゃん、生きろ！ 生きろっ！ てね。だから、もうちよっと生きてみることにしました」

店長はニヤリと笑った。

「寅さんは昨年もその前の年も、確か同じこと言うとったよね」

寅さんが少しはにかんだように見えた。わたしは

寅さんにエールを送った。

「長生きしてくださいな。また来年“安寿子”でお会いしましょう」

2025年・復興を遂げた神戸の街は、更なる発展の真つただ中にある。 《終》

選評

西村 恭子

全てがタイトルに収斂していく。長田区の居酒屋。新米の客に店長が言う。「寅さんが来るんや」。現れた「寅さん」は喪服姿。夜明け前、ひとり出かけた為に家族を失った場所に。その三人が織りなす構成は、忘れようのないあの日と30年後の今を静謐に満たしていく。共に東遊園地に向かう成り行きも自然。それぞれの日々がどうあれ、想いを抱いてあの日から生きて来た、生きて行く。そんな人々の中に居て、やがて東の空が、。余韻が覚めない作品に仕上がって秀逸。

ハルオとトンボ

佐々木 恵美

日傘をさしていつものように、俯き加減でトボトボとマンションまで辿り着いた。

ふと顔を上げたら、隣の部屋に住む小学生のハルオが立っていた。

「あ、ハルオ」

「あ、赤山さん、鍵、鍵、お願いします。こんにちは」

「ん、こんにちは」

オートロックを開けながら、ハルオの姿を改めて見た。両手が塞がっていてインターホンも押せなかったらしい。

雨でもないのに長靴を履いて、小さな透明のケースを首から下げている。

右手には魚取り用の網、左手には大きくふくらん

だスパーの袋を持っている。

ランドセルも背負っているから、学校帰りのようだ。

「それ、何がはいってるの？」

ケースを指さして尋ねると、ハルオは私を見上げながら唇をゆがめ、「赤山さん、これ重たいんだよ」と、網を握っている手から人差し指だけ伸ばしてケースを指さした。

一度「おばさん」と呼んだのを注意してから、ハルオは表札にある名前通りに私を「赤山さん」と呼んでいる。

小学二年生でも読める漢字だからか、それとも親に聞いたのか知らないが。

私は片手でケースを持ち上げ、ハルオの首に掛か

ったその紐を外してやった。襟元から立ち上る、気持ち悪いくらいハルオの熱気を指先に感じた。校帽の下に見える髪の毛も、シャワーを浴びたように汗で濡れている。

そのまま一緒にエレベーターに乗ると、

「今日ね、学校のプールからヤゴを救出したんだよ」と、ハルオは誇らしそうに話し出した。

水を抜いて上級生がきれいに掃除をする前に、プールで育っていたヤゴを、みんなで助け出したということらしい。

「見て！」と言うから、ケースを持ち上げて覗いてみたら、濁った水の中に動くものがあるのがわかった。正直、はつきりとは見たくもなかった。

そうしているうちにエレベーターは8階に着いた。

両手のふさがっているハルオのかわりにチャイムを押してやると、しばらくしてハルオの母親がドアを開けた。毎度おなじみの観察するような目でヌリと私を見る。

母親はヤゴの入ったケースに気がつくといきなり、「ヤゴなんか貰ってきちゃだめって、今朝ちゃんと言ったでしょ！」と、怒鳴ったのだ。

「だって、山田先生が、ヤゴの観察、宿題だって……」

そう説明し始めるハルオを、「いいから早く入って！」と、母親は玄関に引つ張り込み、ドアを閉めるなり音高くロックした。

そうして私の手には、ヤゴの入ったケースが残ってしまった。

「それで、今度はヤゴなんですネ」

ベランダに置いたケースを見て、うちの赤山さんが言った。髭面で頭をぼりぼり掻いているのが演出家の赤山さんで、本当は、私は「赤山さん」じゃない。

ハルオの母親もうつすらそのことに気づいているらしく、隣りは夫婦じゃならしいと、ご親切にご丁寧に、近所に漏らしてくれている。

「ヤゴは、生きている糸ミミズやアカムシしか食べませんよ」

「そうなの？」

「生きているバッタとかでもいいかもしれないけど、どこで見つけます？放っておいたら、共食いするかもしれないね」

いやだ。共食いはいやだ。

「ねえ、またどこかで逃がしてきてよ」

今までも、「お母さんにダメといわれたから預かって!」と、ハルオから様々な虫を押しつけられた。モンシロチョウや、アゲハの幼虫とか、テントウ虫、ダンゴ虫……。そのたびに、赤山さんに捨ててきてもらっていた。

ハルオも、預けただけで満足なのか、あとは見にも来ない。「どうしたの?」と聞かれたら「逃げちゃった」で話は済んだ。逃がしたのじゃなく、逃げちゃったのなら仕方がないのだ。

「でもこれ、ハルオくんの宿題なんですよね?」

そうだ……。ハルオはヤゴの「観察」をしなければならぬのだ。

次の日、赤山さんは釣具屋で糸ミミズを買ってきた。午後にはハルオがやってきて、「観察日記」を書いた。その次の日は休みだったから、三人でバツタを探しにいった。

赤山さんと、赤山さんのアイジンの私と、赤山さんの隣のハルオ。

なんだかおかしな組み合わせだ。

それから三日が経った。赤山さんは撮影でマレー

シアに行ってしまった。たぶん、奥さんも一緒だろう。

私はくさくさして部屋に居る気になれず、友達のところを泊まり歩いた。どこへ行っても、「そうやって呑んでくれるんなら、いい加減にアイジンなんかやめなよ」と嫌がられた。ふん! 私たちの歴史も何も知らないくせにと、その時は思う。けれどひとりになると考えが変わる。

確かにそうなんだ。どう考えたって、いつまでも赤山さんの手の中にいないで、出て行くことを考えるべきなのだ。

あのマンシオンもハルオ母のおかげでだんだん住み難くなってきたし。

でも……とか、やっぱり……とか、考えながら、とりあえず赤山さんに与えられた部屋に戻った私は、部屋に入ってカーテンを開けて、そこで初めてヤゴのことを思い出した。

慌ててベランダに出てケースを覗くと、もうヤゴは一匹も見当たらなかつた。

代わりに羽のひしゃげたトンボのようなものが、いた。

それはまったく動かなかつた。

蓋なんか、締めておくからだ。

どうしよう。

学校が終わるのが何時かわからないけれど、やがて、今日もハルオが「観察」にやってくるだろう。

私は、何も直視しないようにしてケースの中身をゴミ袋に開けた。

それから部屋の中をぐるぐる歩き回りながら、トンボが飛び立つ様子を懸命に想像し、目に浮かべ、何度も何度もハルオに話して聞かせる「嘘」の情景を練り直し、セリフを練習した。

そのうちにその情景が、だんだん本当のこのように思えてきた。

わたしは早くハルオに会いたくてたまらなくなっていた。

「ねえねえ、ハルオ、ハルオにも見せたかったな！ トンボがね、この小さなケースからね…」と、話すのだ。

ハルオをベランダに連れ出して、あの空を指さして！

きつとハルオは目を輝かせて聞いてくれるだろう。

ああ…

ごめんね、ハルオ。

私は大嘘つきだ。

でも、トンボの代わりに、私がかちゃんと飛び立つことにするよ。

ここには蓋なんかないんだもの。

私はヤゴでもトンボでもないんだもの。

きみは「赤山さんはどこ？」って聞かないかな。そして赤山さんがきみに言うね、

「逃げちゃった」って。

選評

西村 恭子

冒頭の四行から読ませる。主な人物は赤山さんと赤山さんのアイジンの私と、マンシオン隣家に住む少年ハルオ。アイジンの私はこれまでハルオにモンシロチョウやてんとう虫、アゲハの幼虫などを押し付けられ飼う羽目に。今回は「ヤゴ」。会話体で進む展開は淡々。「観察日記」を書きに来たハルオと赤山さんとバツタを探しにでかけたり。やがてトンボになるはずだった「ヤゴ」が赤山さんのアイジンの私にもたらしめたものは何か、ラスト一行が光る。

私間違つてない

宇 貞 み き

「えっ？ なんやて？ 大きい声で言え」

電話の向こうで父が怒鳴る。

「私、すごい大きい声で言うてるんよ。おとうさん、かなり耳悪うなつとるんよ。やっぱりもう補聴器使った方がええんやわ」

私も怒鳴り返す。いつもこうなのだ。

父は、おまえの声が小さいからや。わしの耳は別に悪うない。岡崎さんと話す時は、なあんも困つとらん、と言う。ちなみに岡崎さんというのは実家のお隣さんで、父と同年代のご夫婦である。おそらく、お互い大声で話しているのだろう。

今日は、言い方を変えてみることにした。

「ねえ、おとうさん、私もそろそろええ年になってきたから、一遍ちゃんと聴力検査を受けてみよう」と

思うんよ。どうせなら松山耳鼻科で。久しぶりに松山先生に会いたいし。でもあんまり久しぶりでちょっと照れくさいから、一緒に行ってくれへん？」

松山耳鼻科というのは、小さい頃、鼻風邪を引くたびに連れて行ってもらった近所の医院である。

「でも、おまえ、仕事は？」

「有給取るわ、沢山残ってるから」

「そうか、そうか。おまえ、ずっとあの先生に診てもらってたもんな。よっしゃ、ほな、とうちゃんがまた連れてつたら」

父は上機嫌でそう言った。

作戦成功である。これで、一緒に聴力検査を受ける流れにすればよい。

父がこれから少しでも生活しやすいうようにしてお

いてあげたいのだ。

「今日、父のところに行ってくるわ」

と言うと、夫はちよつと心配そうな顔になった。

「一人で行ける？週末なら一緒に行けるけど？」

「ううん、大丈夫。父と二人きりで会っておきたいから」

と答えると、夫は私の気持ちを察したようで、じゃあ気をつけて。途中でもし気分が悪うなったりしたら、すぐに連絡してな、と言った。

うん、ありがとう、と私は言い、もう来週の準備は全部できてから暇やしね、と付け足した。夫はわずかに顔を曇らせ、何か言いかけてやめ、もう一度、気をつけて行きな、と念を押してから出勤していった。

私は夫と同じ会社に勤めている。今、長期休暇を取っているのだ。来週から入院して、手術を受けるからだ。この数年の間に何度か入院はしてきたのだが、短い期間だったので父には言わずにいた。心配をかけたくなかったのだ。でも今度の入院は長くなりそうだった。はたして今までのように父に黙って

いてもよいのか、迷うところだった。

電車を乗り継いで実家に向かった。

五年前に母が亡くなってから、父はここで一人暮らしをしている。

着いてみると、父は庭で草むしりをしていた。おとうさん、と何度か後ろから声をかけたけど、振り向かない。前に回って、おとうさん、と大声で言うとおう、来たか、とやつと気づいて立ち上がった。やはり相当耳悪いな、と苦笑いしてしまう。

一緒に家に入り、母の仏壇に手を合わせてからお茶の用意をした。台所は片付いているから、たいして料理もしていないのだろう。母が亡くなった時、父に私達のところに来て暮さない？と提案したのだが、いや勝手知ったるところでのんびり暮らしたい、と断われた。私が定年退職したらもう一度ちゃんと話し合おうと思っていたのだが、うかつなことは口にできなくなっている。

二人で松山耳鼻科まで、ゆっくり歩く。よう車で連れて行ってやったなあ、と父はなつかしそうに言う。父は今車の免許を返納している。

松山先生は私のことを覚えてくれていて、もうお孫さんがおられるようなお年かな？と聞いてきた。いえ、私は子ども、いないので。でも、もうおばあさんって年なんで、聞こえの検査をしていたかどうかと思って、と私は笑って説明した。先生、よう診てやって下さい、と父は横から口をはさむ。どうやら自分は付き添いのつもりらしい。

聴力検査が始まった。ヘッドフォンを付け、ピーっという音が聞こえるたびに手にしたスイッチを押していく。だが、やっていくにつれ、だんだん自信がなくなっていく、なにもかも間違っている気さえしてくる。

あともう少し不妊治療を続けた方がよかったのだろうか？あと少し、もうちょっと、とがんばってきたけど、すっかり疲れてしまったな。

病気がわかってからはどうだろう？一生懸命考えたり調べたりして治療法を選択してきたつもりだが、今回の手術は？自分では納得しているのだけど、これは正解なのか？ぐるぐるといろんな思いが頭の中を回る。

「はい、終了です。問題ないですね」

ふいに松山先生の声が聞こえた。

せつかくですからおとうさんも一緒に検査を受けられては？と先生に勧められ、そうだな、ほんついでに診てもらいましょうか、と父は案内素直にヘッドフォンを着けた。そして、先生早う始めて下さい、などと言いい、もう始まつてるんですよ、などと言われて首を傾けている。要するに聞こえてないわけだ。

結局、父は後日もう少し詳しい検査を受けて補聴器を作ることになり、私はほっとする。

「おまえの言うとおりにやったなあ、おまえは子どもの時から真面目で賢い子やったもんなあ、おまえの言うことは間違いないやわ」

駅まで見送ってくれながら父はしみじみ言う。そうよ、と私は笑い、少し考えてから

「あのね、おとうさん、私これから仕事がいざばらく忙しなるのん、電話もなかなかできんかもしれんけど心配せんといてね」
と伝えた。

そうか、と父はうなずき、実はこのごろかあさん

がよく夢に出てきて、まだこつち来んといて、あの子のそばにおったって、言うんや、と言いだした。

母はあの世でも私のことを心配してくれているのか、と胸を衝かれた。

「おとうさん、子どもも孫も見せてやれんでごめんね。親不孝やね」

ふいに松山耳鼻科でのやりとりが思い出され、私がそう口になると、父は思いがけず強い口調で、

「そんなことはどうでもいいんや。子どもが元気で幸せやったらそれでええ。何よりも大事なことは、親よりも長く生きることや」

と怒鳴った。単に耳が遠いから大声になったのでもなさそうだ。

母より長く生きられたのはよかったけど父より長く生きられるかはもう自信がない。

もう駅前まで来ていた。

「おとうさん、私、実は」
思い切って口を開いた時、父は急いで腕時計に目をやり、電車来るで、早う行かんか、と促した。

「今日はありがとさん。おまえのやることは間違いないんやから、しっかり仕事がんばって、一段落したら今度はゆつくり帰ってき」

父は早口になっている。目の縁が赤い。

父は気づいていた。

「うん、そやね。絶対帰ってくるから」

父が気づいていることに気づかないふりをして、明るく手を振って改札口を通った。

振り返ると、父はまだそこに立っていて、大きく手を振っていた。うなずきながら。

私も、大きく大きく、手を振り返した。

選評

葉山 はずみ

五年前に母が亡くなり独り暮らしをしている高齢の父の耳が遠くなってきた。頑なにそれを認めようとしない父を病院へ連れていくために「私」の付き添いを頼む。そのついでに父の検査もしてもらう。案の定、父の耳は遠くなっていた。手術を控えた私は父に仕事で忙しくなるからと嘘を伝えるが、父はそのことに気が付いた上で知らないふりをする。耳は遠くなつたとしても娘の心の声はしっかりと父に届いている。父の娘の愛情が心に沁みた作品。

みどりの芝生

ノエビアスタジアム神戸の場内がテレビに映し出され、グラウンドのみどりの芝生を見ると、目の前に浮ぶ想い出がある。

戦後、ノエビアスタジアム神戸の辺りは、競輪場だった。周りは戦火の爪痕を残したままの痛々しい広っぱで、雑草が生い茂っていた。競輪場から東へ三〇〇メートル余り先の広っぱの端に、焼け残ったレンガ塀があり、それに沿うように小さな保育所がたっていた。

当時は、戦後復興のため女性の家庭外就労が始まり、それに伴う託児需要の高まりに対応し、神戸市は、市内の四か所に簡易保育所を設置した。広っぱの片隅にあるのもその一つで定員幼児三十名、保育

士三名の市立保育所だった。園舎は市電の廃車二両を連結し、更にL字型に、進駐軍の犬舎だったトタン葺の小屋を遊戯室として並べ、周囲をフェンスで囲ったもので、外観は見窄らしかったが、子ども達には「電車保育所」の愛称で親しまれていた。

昭和三十三年春、胸躍らせながら私はこの「電車保育所」で保育士としての一步を踏み出した。ここでの日々は新鮮な体験お連続だったが、別けても競輪場の存在は大きく思い出深いものがある。

競輪開催日となると、市電から吐き出される人の他にどこからともなく男達が集まり、列をなしてどろりどろりと競輪場に向って行く。場内で「カンカンカン」と打ち鳴らす鐘の音は脳天まで響く。午後になると当て外れでか、酔った風体の男達が何故か

吉 田 ちず子

保育所の周りを彷徨き、時にはフェンスの際で小便を放つ者もあり、フェンスには朱で鳥居を描いた板片が二か所張りつけてあった。

不気味に思いながらも、競輪場とは一体どんな所なのだろうとの私の好奇心が切掛けとなり、八月のある日主任、先輩と一緒に出かけることになった。一人一枚づつ車券を買って入場すると丁度レースが終ったようで、場内は歓声と唸り声が混ったような大音声であり、観覧席の男達の手を振り体をくねらす姿の異様さに恐れながら着席し、正面を向いて驚いた。そこにはみどりの芝生を敷き詰めた広場があり、芝生の真ん中の大きな花壇にはカンナの花が赤々と咲いている。何とまあ、美しく豪華な景色である。「ちょっと、これなによ」と隣に座っている先輩の独り言が聞える。「おかしいですよね」と私も呟いた。

保育所には子ども達が遊ぶための庭はあるが狭く、一面に川砂利が敷き詰められ、歩くとじゅりじゅり音がする。石の大きさは四、五才の子どもが握りしめるのに程よく、毎朝子ども達を集め「石を投げないようにしましょう」と主任が囁んで含めるように話しかけているが、時には額にこぶをつくり泣

き叫ぶ子どもがいる。フェンス側にほんの少し花壇はあるが樹木はなく、見渡すかぎり保育所の周辺には、子どもの目を楽しませるようなみどりの景色など見あたらぬ。だのに、賭けことに戯れる男達のところは何故こんなに美しい景色があるのか。おかしいと思った。

その日から暫たったある朝、九時半頃だったと思うが「子ども達を集めてください」との主任の大声に何事かと驚いた。主任の話すには、先日競輪場の関係者に「子ども達に競輪場の芝生の美しい景色を見せてほしい」と頼んでいたところ、たった今知らせがあり「今から直ぐだと入場可能」とのこと。余りにも唐突すぎるが、子ども達は園外に出かけると分ると大喜びした。子ども達には行先を知らせていなかったもので、競輪場の入口で止まると「ここ競輪場や」と怪訝そうな顔をしてざわついたが、主任が「静かに」とジェスチャーで示すと、急に緊張した面持で行儀よくゲートをくぐり競争路に出た。その瞬間、「うあー」と子ども達は歓声をあげた。中央の広場の芝生は、初秋の日射しを浴びてみどりが耀いて見える。花壇のカンナに花は、陽の光を十分吸いこんだように生き生き咲いている。観客のいない場

内は広々として明るい。

「広いなあ」「きれいなあ」「赤い花可愛いー」
子ども達は感激をすぐ言葉にして喋りだす。と突然一人の年長児（五歳）が競争路を走り出し、続いて四、五人が走り出した。

「まって、まだ走ってはだめ、止りなさい」と主任が大声で呼びかけるが、子ども達は止らない。たつた今着いたばかりで、子ども達にここでの注意ごとや約束ごとなど話していない。主任の焦る様子を見て、咄嗟に私は先頭を走る子どもの名前を呼びながら「待ちなさい」と後追いついた。しかし子ども達はどんどん走る。競争路は播鉢状に傾斜しているので走りにくい。先の子どもが脱ぎ飛ばしたゴム草履を拾っている間に、後から走ってきた子ども達が追い抜いて行く。振り返るとみんな一団となって走っているようだ。

どの子どもも走った、走った、私も走った。円周の中程か少し手前あたりで先頭の子どもがしゃがみ込み、そこが到達点のように次々と走ってきた子ども達はしゃがんだり、仰向けに寝転んだりしながらハアハア肩で息をしている。最後に三歳の女の子が担任に手を引かれゆっくり到着した。

保育所の子ども達が全速力で走る姿を始めて見た。どの子ども達もよく走るのに感心しながら、日頃保育所でも、もつと走りたいのだろうと思った。子ども達の回復は早く「先生もつと走りたい」と言い出したが、今度はみんな一緒に走ろうと約束した。十分休息してから主任が先頭になり、みんなですつたり、歩いたり、止つて歌をうたつたりしながら競争路一周を廻り終えた。唯一人として転んだり擦り傷を負う子どもはなく、みんな笑顔で「ありがとう」の言葉を残し、競輪場を後にした。帰る道々子ども達は「先生明日も来たい」「今度いつ来るの」と口々に言うが、主任は「またね」と応え、それに倣つて私も「またね」と繰り返しながら歩いた。競輪場など然う然う子どもが行く場所ではない。「またね」のまたの日は二度とこなかった。そして、その年の年度末に市内四か所の簡易保育所は閉鎖され、それぞれの近くの近くの場所、運動場を備えた新築の正規保育所として生まれ変わった。

近年ヴィッセル神戸は勝負強い。必勝を祈願しつつテレビをつけた。ノエビアスタジアム神戸の場内が映し出され、試合寸前のグラウンドが画面に広が

る。芝生のみどりは今日も鮮やかである。

終

選評

葉山 ほづみ

昭和三十三年、ノエビアスタジアム神戸の辺りに競輪場があり、その近くに市電二両を繋げた『電車保育所』があった。そこで保育士として働きだした。競輪場からは脳天まで響くカンカンカンという音が響き、酔っ払いが保育所の周りを歩く。ある日その競輪場へ足を踏み入れることになった。競輪場の中には緑の芝生があり花々が植えられていた。園児たちにそれを見せたい。保育士たちは競輪場に頼み、園児をその芝生へ連れていくことになった。戦後、最低限の設備の保育所と夢のような芝生のある競輪場。その対比も保育士としてその中で必死に子どもたちを思う姿が印象に残る。

揺れる

後藤 康子

「地震やでえ、机の下に入りい」

「お母さん、大丈夫？」

私の絶叫に、隣の部屋から母親を氣遣う子どもらの声がある。

ドシャーン、ガチャンガチャン、バサッバサッ、ギギー、これまで耳にしたことのない音が、あちらこちらからする。地の底から何かが突き上げてくる。

揺れと震えが止まらない。これまでに感じたことのない不安が走る。恐ろしくて、不気味で……。

暗闇の中、電灯のひもを何度も引くが、ぶらりと大きく揺れるだけ。

1995年1月17日午前5時46分、阪神・淡路大震災が起きた。団地6階で、母子3人、これまで体験したことのない揺れに遭遇。恐る恐るカーテンを

開ける。夜明けは、まだだ。「とにかく外に出よう、毛布を一枚ずつ持って」足元が危ないから靴下を履きいや」重い玄関ドアを開けて、3人ホッとした顔を見合わず。暗い階段を降りて避難場所の小学校に向かった。

グラウンドに続々と人が集まってくる。誰もが寒さと不安で凍りつきそうな顔をしている。

西の空の赤い炎が牙をむいて襲ってきそうだ。「長田の方やなあ」「真っ赤やなあ」。漆黒の闇の中、押し殺したような声が周りから聞こえてくる。地の底からの揺れが絶え間ない。

数年前に離婚した私は、女と子どもたちだけの暮らしを、どうしようもなく恐ろしく感じた。まず現状を親に報告しようと、公衆電話の長い列に並ぶ。

遠く離れた九州のテレビ報道ではピンとこなかった父も、緊迫した私の声に、とにかく帰ってこいと言いつ張った。

頭のなかを整理できぬまま指定された図書室に戻ると、みんな無言で震えている。

後で聞いた話だが、神戸の惨状を知った父は、仕事中の弟夫婦を早退させ、すぐに神戸の私の許に向かわせたという。

「水とおにぎりを持てるだけ持って伊丹に飛んだ。でも尼崎から先は交通手段がなくて一步も進めなかった、泣く泣く帰ったんよ」弟は言っていた。

時折やってくる揺れの中、娘の勤める老人ホームから避難場所の小学校に迎えの車が来た。須磨区の中腹にあるホームは、比較的被害も少ないという。

介護士の娘は通常の仕事をし、私と息子も、そこに避難することになった。あわただしく動き回るスタッフたちと、物珍しそうに私たち母子を眺める利用者の中で居心地の悪さ、どうかしなくては、と気持ちだけが焦る。2日間、そこで世話になった後、娘を職場に残し、息子と九州の実家に帰ることを決心した。

明石方面までバスを乗り継ぎ、JRで姫路まで行

く。やっと新幹線に乗車、自身の裡では揺れが続いているのに、車内には地震の影さえもなく日常が繰り広げられている。

この地震は、野島断層のずれによる震度7.3の都市直下型だという。神戸市街地の被害は甚大で、ガス・水道・電気などの生活インフラは絶たれ、新聞社・病院なども被災し、広範囲において全く機能しなかった。

小倉（こくら）で、新幹線から特急に乗り換え、故郷の大分駅に着いたのは夕方近かった。実家の木戸に立つ私と息子に両親は縫りつかんばかりだった。「大変やったなあ。ゆっくりしいや」母はふたりの顔をなで、確かめるように足元へと手を滑らせた。「もう神戸には帰るな、暮らし向きは父ちゃんが何とかする」父のことばが続いた。

九州にも神戸の惨事はテレビで流れていた。

勤務先のある長田区はとても目の向けられる状態ではない。ぐちゃぐちゃに壊れた家々が映し出されたが、以前と同じ姿の我が社にほっと胸をなでおろした。

（神戸に帰るべきか、あの中で母子やっていけるのだろうか？）数日を過ごすうちに、考えが次々と頭

の中を巡る。

「今、九州の実家に帰っています」まずは報告、と思つて勤務先に電話をする。「神戸から逃げたんか」社長がいきなり言う。私には、返す言葉がなかった。

(やっぱり神戸に帰ろう。私には仕事がある。両親に迷惑はかけられない)結局私は、息子を実家に残して神戸に帰ることを選んだ。唇をかみしめ、きつく目を瞑っている父を、背中を感じながら……。

新神戸駅に着き、在来線に乗り換えた。変わってしまった窓外の景色に言葉が出ない。瓦礫の山となつた街、かろうじて残つた屋根のブルーシートが風に揺らめいている。

住まいの団地は半壊証明が出ていて、とても住める状態ではない。姉のように慕う塩屋に住むY子宅に身を寄せることになつた。時々揺れる布団の上で、私の気持ちも揺れに揺れる。塩屋の山の上も断水しており、彼女は一日に何度も給水所に走る。この非常時に家族の食事だけでも大変なのに、居候の私のことまでやってくれる。ますます小さくなつて暮らすことになつた。「ごめんね」私は繰り返す。

「こんな時は、お互いさまや」姉御肌のY子に反対に叱られもした。もつと明るく笑顔でいるべきだつ

たのに、私にはそれが出来なかつた。

会社最寄りのJR新長田駅付近の盛土が崩壊し駅設備が全壊して利用できない。播磨方面から通勤している社長が、遠回りして私の送迎をしてくれることになつた。毎朝待ち合わせ場所まで送ってくれるY子の優しさに、嬉しさと申し訳なきが私の裡に同居する。それにもまして、普段はことばも交わさない社長の高級車に客のように乗る自分がコチコチに硬くなつて身動きさえできなかつた。

建設会社に在籍している私は、日常業務の他、社員のための炊き出しをし、おむすび作りなどもやる。住宅建設などを手掛けていた我が社だが、震災後は倒壊した家屋の後処理に走り回つていた。直後に、全壊の家屋を掘り起こし、瓦礫の下から変わり果てた遺体を引きずり出したこともあつた、と若い社員が青い顔をして言つていた。心が潰れそうになりながら、ただただ目の前のことに向きあい、進むだけの毎日だつた。

3か月ほどして団地の我が家に戻れることになつた。テレビが壁の前まで移動。本箱は倒れ、すべての書物が畳の上に散らばつている。洋服ダンスと整理ダンスは部屋の真ん中に鎮座。キッチンでは、扉

が開いたままの冷蔵庫が、部屋の真ん中のテーブルとくっついている。食器棚の扉も全開、その前に陶器やガラスの破片がごみの山だ。悲しいのを通り越して、茫然となって眺めるだけ。

娘は職場に泊まり込み、息子は九州から帰って来た。彼は毎日のように弁当支給の列に並び、2人分の貴重な食事を支えてくれた。

電気と水道は使えるようになっていたが、ガスは、まだ使えない。元町高架下で、煮る・焼く・蒸すなど一台何役もこなす電気鍋と、ほとんどが割れてしまった食器を調達した。間に合わせの食器とそろそろ出始めた食材での生活がしばらく続くことになる。

小学校のグラウンドに自衛隊の風呂が設置された。カーキ色のテントに囲まれた広い風呂に浸かり、久しぶりに腹の底から息ができたような気持ちになった。筆筒類の移動をボランティアにお願いすると3人の若者が来て、馬鹿でかい筆筒を元の位置に戻してくれた。結婚時、父が神戸のデパートで買ってくれた筆筒の前に立ち、以前の生活が取り戻せそうな気がした。

地が揺れ、心が揺れた日がずっと続いた。大震災

という未曾有の出来事に遭遇し、恐怖と不安に慄く一方、人の暖かさ命の大切さを感じて必死に生きてきた。神戸での震災体験が私を強くした。

来年1月17日、あの日から30年がやってくる。

選評

西村 恭子

1995年1月17日午前5時46分、あの揺れがもたらした壊滅的な惨事はそれぞれの人に語り尽くせない記憶として残る。その中で起きた苦悩、葛藤、錯綜、家族の思い、それらがこの作品の中でリアリティーを持って語られる。地の揺れ、心の揺れの中からやがていのちはかけがえなく、人は温いに至る。そしてほのかに見えるそれぞれの歩き方、暮らし方、生きる方向。それがタイトルに結ばれる。幾多の揺れの一つの記録として。

三 席

星を齧る

私が昔住んでいた家の先には、子供の頃、缶蹴りをして遊んだ神社があります。神社の下には河原があつて小川が流れています。河原が私の通学路でした。河原の土手には道があるのですが、私は季節が感じられる河原の方が好きな子供でした。久方ぶりに歩いてみたくなりました。河原は思いのほか足場が悪く、降参して土手へと上がりました。何だか情けない気分になりました。再び河原へ下り、先程よりは随分長く歩きました。転倒に注意しながら向こう岸へと渡ると、今までの河原の景色を見ながら休み休み、歩きました。そうこうしていると土を被った表札が落ちていました。校門は引き抜かれ、瓦の落ちた木造家屋の家が一軒、校長先生が寝泊まりしていた家です。後は一面、草ばかりでした。

吉岡辰児

雨です。軒下へとやって来るとそこには先着がいました。菅笠を被った女性です。

「この時期の雨は、村人たちの話し声みたいに賑やかですが、じきに止みます」

私がここへ来た事情を話しますと、女性は時間潰しにと昔話をしました。雨音に紛れ、聞こえてくる語りは、過去に生きた者が乗り移ったかのようでもあり、又、偶然、神社の床下で見つけた古い書き物を手にとつて眺めているような錯覚を起こさせました。村人たちは慣習であつた春秋の祭りや盆踊りなどの諸行事を、何とか守り続けてきたのですが、その跡を継ぐ者も無く、墓守と葬儀を限りまでやり遂げた者は旅の遍路で、遍路はある日炎天下に倒れ、その姿を見つめる者も憐れむ者ありません。この

者だけは墓もなく、故に名も刻まれず、骨になり果てましたとそこまで話したところで雨は止みました。私は女性と別れました。

話の中で、女性が私に似た誰かを、どこか遠いところから見ているように感じさせられる場面が出てきたのですが、あれは私の聞き違いだったのでしょうか。更に、女性が言った「村はもう誰もいない」と言うのは、「女性以外は誰もいない」と言う意味だったのか、とても気になりました。

子供の頃、村は既に過疎が始まっていました。大人と子供を合わせて百と数十人足らずの、いや、もっと少なかつたかもしれせん。全員が全員の素性を知っていました。数十年の歳月が流れていたとしても、同じ時代を過ごしたさなかに、あのような女性がいた記憶もなく、恐らくこの村によく似たどこかの集落の話なのだと思うようになりました。菅笠を被った顔の奥など覗き込むような真似はしておりませんが、雨の降りしきる中、軒下で肩が触れる程近くから聞こえてくる声の艶、髪の毛の匂い、「びやくえ」に身を包んでいても、年頃の女性なのだろうと気づくものです。女性の母親、いや、祖母の話であれば、私と年が合う気もしました。ただ、その佇まい、そ

の落ちつき、醸し出す雰囲気などは、相当な年を重ねた者でなければ出せるものではない気がするのは妙ではありません。

これ以上詮索するのは女性に失礼な気がしました。私の家族は、私が卒業するとすぐ引越しを済ませてしまいました。当時はそのような家族は別に珍しくもありませんでした。今日私が来た理由も、永らく放置していた先祖代々の土地を国に返す算段の為でした。もはや私は、この村においては遠い過去の存在であり、例え女性がこの村の話をしていたのだとしても、それはそれで、もう、どうでもいい気がしたのでした。女性は名前を告げたのですが、話を聞いているうちに忘れてしまいました。再び女性がいいたところへ戻って、「最近、私は昔の話は覚えていても、今、言った話など、すぐ忘れてしまいがちで」とか言って、あれやこれやと聞くのも下心があるようでみつともない、気分を害されたらつまらない、もう二度と会わないのだからと思いました。後は御覧の通り、何がある訳でもない、山ばかりの景色じゃないかと自分に言い聞かせながらも、あと少しだけ、私は過去の余韻に浸りたかったのでした。やって来たのは川の曲がり具合からして校舎の裏

庭辺りでしょうか。囲った石の枠が池の面影を残していたのは嬉しい限りでした。兎の飼育小屋、校舎より高かった木、いずれもありません。私は飼育係でした。木登りの上手な上級生が木のてっぺんから手を振る姿が校門から見えたものでした。便所もあつたはずですがありません。天井には蝙蝠がいて、電球もなく、建付けの悪い扉は、どれもが一度縮まると子供の力ではどうしようもありませんでした。いつもは半開きのまま、用を足すのですが、その日はもうすぐ午後の授業が始まる時間。私は駆けて来た勢いで、つい、ボタンと閉めてしまったのでした。低学年の子がやって来たのですが、私の声をお化けと間違え、逃げてしまいました。下校の時間となり、「螢の光」が流れる中、扉が開きました。同級生全員と担任の先生の顔が、ズボンを下げたままの私の目の前に並んでいました。

どこから聞こえてくるのやら、お囃子です。耳鳴りだろうと思ったのですが、どうもおかしい。いや、おかしいのは景色の方でした。先程までは気が付かなかったのですが、校長先生の家が弦や葉に驚掴みにされ、悲鳴をあげているように見えるではありませんか。私にはここら一帯の自然が、大きな命の塊

に見えたのです。雲間の陽が叢に差し込みました。

『ああ、斬ってしまったのか!』

年輪には長年に渡る風雪で劣化し、裂け目が入っているとはいえ、どこか風格がありました。それはまるで小さな舞台そのものでした。中央には櫓が建っています。山車を引くのは三匹のカブト虫。力強く頼もしい限りです。御者は蟻螂。櫓の上では殿様飛蝗が小気味よく太鼓を叩きます。山車は川底から調達したであろう小石の車輪に川辺に咲く蒲公英の綿毛の幌。小枝や枯葉に獣毛を敷き詰めた座席。実に見事な出来栄です。櫓の周りでは踊りを踊っている蝶の姿。クローバーの葉を扇子に見立て、艶やかに舞っています。その周りでは先程から聞こえていた木の実や、落ち葉でこさえた鼓や笛を鳴らす蟻と謡を任された蟋蟀の群れ。私は蝶ばかり見ていました。私の胸の鼓動が、次第に高まってゆくのを感じておりました。

あれは卒業式の朝でした。私は飼育小屋の二匹の兎にお別れを言いに来ました。小屋の中で二匹は体を寄せ合い、そのうちの二匹がまるで鶏が卵を温めるようにして、空の牛乳瓶に乗っかっていました。

瓶の中では狂ったように羽を動かす蝶の姿がありま

した。兎の腹が瓶の蓋を塞いでいたのです。私に気づいた一匹は人參でもくれると思つたのでしよう。一匹が離れると、つかい棒をなくしたもう一匹が目覚めました。牛乳瓶は転がり、蝶はまだ寒い弥生の空を、ありつたけの力で、ばたばた、ばたばた……。

夜も更け、螢が現れました。火燐の如き寂しい光です。虫たちは村人の姿となり、大きな網を夜空に向けて振り上げております。網にかかった螢は星になりました。辺りはお煎餅でも齧るような咀嚼音で一杯です。目の前に菅笠を被った女性が現れ、私も一つもらいました。星を齧る毎に思い出が蘇り、消えてゆきました。女性は蝶の化身で、あの日、村を去った私を捜して遍路までと言いました。菅笠の奥の顔が見たくなり、思わず足を踏み出すと、何かが割れる音がしました。踏んだのは骨で、つい今し方、倒れたかのように仰向けのまま、地面に横たわっていました。

目覚めた時はもう真つ暗でした。切り株に腰かけた私は、一体の古木にでもなった気がしました。帰りは河原に下りる気にもなれず、黙々と土手を歩き

ました。やっと神社まで戻り、石段に腰を落ち着けました。社殿の床下の暗闇を見てみると、あらゆる感情が吸い込まれてゆく気がしたのでした。(了)

選評

葉山 はずみ

昔住んでいた場所を久しぶりに訪れた私は菅笠を被った女性と出会う。その女性と話すうちに、捨てるように出て行った過疎化する村で過ごした日々を回想する。この作品の良いところはいつの間にか読者を現実ではない世界に引き込む力があるところだと思う。切株の上で虫たちが賑やかに動き回り、ラストで虫たちが村人になり星となった螢を網で捕まえその星を齧る場面は、村を捨てた私の罪悪感が浄化された暗喩なのだろうと感じた。過疎化の村を比喩にその地を覆う虫たちを使うという発想が良かった。

元町商店街を歩く朝八時

財 部 香 織

毎日朝八時、神戸駅から出発して元町商店街を歩くのが私の日課だ。

少なくともここ三ヶ月ほど同じ経路を歩いている。たまに飽きを感じて他の道を歩いたり目的地を探してみたりしているが、居心地の悪さを感じて結局いつもと同じ経路を歩く。雨の日でも、アーケードがあるので濡れずに済むのがとても気に入っている。

ここから、平日の朝の風景の一例を紹介したい。ラジオを大音量で聞きながら歩いている人、この人を見かけるのも毎朝のルーティンだ。何を聞いているのかまではわからないけれど、大きな音も余裕のある朝聞く分には微笑ましく感じる。

昼間は入ってこない、ゆっくりと走るトラックの

往来にはヒヤヒヤさせられる。邪魔にならないように、少し遠くを歩くようにしている。

朝早くから荷物の積み下ろしをする八百屋さんのコンビは、タバコをくわえたまま荷下ろしをしているように見えたので少しぎよつとした。

改装して新装開店するホルモン串屋さんの改装の過程を毎日見ている、前身の店には入ったことがなかったのが今度が入ってみたいなどひとりごちる。

長らく店を閉めていた傘屋さんの改装がはじまったのを見て、ほっとした。このまま閉店してしまうのではないかと心配していたから。

トラックに積まれた真つ赤なポインセチアの山に季節を感じたりもする。これからコーヒー屋さんの店舗の中をクリスマス色に飾るのだろう。

信号が赤でも平気で横断歩道を渡っていく人々にハラハラしたりもする。仕事に向かう人たちはみんな急いでいる。それを見て私は

「働いている人たちみんな頑張っているな、頑張れ」

と心の中でつぶやくのだ。

まだ開店していない店の窓際に置かれた、水色のクリスマスツリーが寂しそうにたたずんでいる、この店も開店したらにぎわいを見せて、ツリーも寂しくないだろう。

缶コーヒーで休憩する、店内の改装を担う職人さんたちは、楽しそうに談笑して見ていて嬉しくなる。

毎日見かけるビル清掃のお姉さんにさえ親近感を感じる。同じ時間に通っていて、私のことも覚えていてくれたりしないかな、と淡い期待を抱く。

休日である土曜日、日曜日はまた違う風景が見られる。閑散として、静まり返っている。トラックの往来もころなしが少ない。平日の朝とは行き交う人々の顔ぶれも全然違っている。

いつもは一人で歩いているが、休日は夫と連れ立って歩くのも楽しい。あの店がなくなったら、新しい

店がオープンした、馴染みの店にまた寄りたいたいね、と話しながら歩く。

朝歩くことを続けていて良かったことが三つある。一つ目は、体力がついたこと。二つ目は、朝起きて活動できるようになったこと。三つ目は、街の変化に気づけるようになったことだ。

神戸駅から西元町を経由して商店街の終点、元町一丁目まで歩くと私の足では約四千歩である。毎日歩くことの積み重ねで、いつしか夫よりも体力がついていたようだ。毎日精力的に活動できるようになった。

朝起きて活動できるようになったのは、体力がついたことと関係あるかもしれない。それに加え、朝の日光を浴びて体内時計をリセットすることができるようになったのだろう。三ヶ月前までの私は、過眠がひどくて日中も寝てばかりいた。それに比べると大きな進歩をしている。

街の変化に気づけるようになったことは、毎日歩いていけば当たり前を感じる。日々変わる風景を眺めていると、毎日元町商店街を歩いても飽きない。

元町一丁目の商店街出口にある「Goal or

Restart」と書かれた看板が好きだ。陽光を浴びて、光っているように見える。この言葉に一日をこれから始める勇気をもたらしている。実際には、このまま元町駅や三宮方面に向かうのか、それともUターンして元町六丁目方面に戻るのかを促している看板だが、精神的に前向きになる効用があると感している。

私はこの経路がとても気に入っている。これから毎日歩き続けていく。たまに他の経路に浮気するかもしれないけれど、すぐ帰って来るだろう。

選評

西村 恭子

震災作品が重なる中、30年という時を経た元町商店街の朝八時。この時間を歩きながら静かにその毎日を記している。「歩き人」の目に映る情景は淡々として静かだが、確かにそこにある町の空気と人の動きで元町という場所の姿を捉える。あの震災を経たからこそその安堵感なのかとも思うが、朝八時というこの時間の設定にも惹かれた。早くもなく、遅くもなく、かけがえない「その日」が始まる絶妙な時間とも思えて。

震災関連特別賞

災害時ペットと一緒に避難を

大災害が起きたとき、家族の避難場所に飼い犬や猫などのペットも一緒に過ごせる施設を、行政が主体になって作る機運が高まってきていると感じて嬉しく思っています。

家族に寄り添って生きている犬や猫は、家族を信頼しきったその愛らしさ、仕草はおかしくもあり可愛くもあり、心を和ませ、ストレスを緩和してくれる存在です。

家族が災害に遭遇したとき、いつも足元に寄り添ってくるこの小さな命も一緒に避難するのは当然だと思えます。しかし、三十年前の阪神・淡路大震災のとき、「この非常時に犬や猫を避難所に連れてくるなんて非常識きわまりない」と、言わずもがなの、非難の目があふれていたのが実態でした。

橋本 まさ子

私は目撃しました。多くの被災者が避難していた小学校の玄関先、そこは寒風が吹きすさぶ場所、段ボールの上で一匹の猫を抱いた婦人が遠慮がちに座っていたのです。「この非常時に、たかが猫を連れて来るなんて」周囲の冷たい眼差しを感じて奥へ入るをためらつてると思いました。

「その猫を預かりましょうか」

思わず声をかけました。一瞬身構えましたが、非難されているのではないと知り、ホッとした表情をされました。しかし、びっくりしたのはその後でした。

ご婦人とのやり取りを聞いていた数人の方が私を取囲んだのです。

「我が家の猫もお願いしたいのですが」

「壊れた家に仕方なく置いてきました」

「余震が来ると崩壊するかもしれない」と、口々に、崩壊家屋に置いてきた飼い猫への思いを訴えられたのです。申し訳ありませんが預かれるのは三匹だけとそれぞれのお宅からの「預かり猫」を引き受けました。

我が家には一匹の飼い猫がいましたから扱いには慣れていました。各部屋に段ボールで作った隠れ場所やトイレを用意して、飼い主の方から、預かる猫の性格、性質をお聞きしてお世話を始めました。

どの猫も飼い主に可愛がられていたからでしょう、性格が穏やかで、何のトラブルもなく凄し、半年から長い猫で一年、預かって飼い主の方が迎えに来られ、連れて帰られました。

この体験で、私の日常は保護猫活動に大きく舵を切っていきました。近くの公園にできていた仮設住宅に避難していた人たちが引き上げた後、転居先がペット禁止だからと多くの猫が置き去りにされたのです。猫は繁殖力が強く、ほとんどの猫は不妊手術をしていなかったため自然にどんどん増えていきます。餌を求めて彷徨う猫を見かねて餌やりをするお方。当然の行為なのですが、猫嫌いの人たちとのト

ラブルは、時には警官の出動する騒ぎになることもありました。

「餌をやり続けるから増えるのだ！」と、怒号が渦巻く地域紛争は、弱い者イジメさながらの光景が繰り返り広げられました。一帯は「餌やり禁止」の張り紙だらけでした。

非難の応酬だけでは解決の糸口はないのです。餌やりさん呼びかけ、一緒に始めたのは、増やさないようにすることでした。まず捕獲して不妊去勢手術をして元に戻す活動です。資金をつくるためにアルミ缶の収集をし、売却を始めました。

その後、大阪の指定病院まで運べば、手術費用の無料券が使用できることをネットで知り、団体登録。仲間や行政とも連携しながら一歩一歩、野良猫たちを増やさないと、一代の命を見守る活動が広がり、賛同者がふえていきました。

大阪の指定病院まで運ぶ、その指定病院が、神戸にも開院、協力の和の結末をと「神戸にゃん太の会」を発足しました。

全国に先駆けた神戸市の「人と猫との共生条例」が生まれ、強力なバックアップも得ることができるようになりました。せつかく生まれた命の重さ、人

も猫も共に生きられる地域にと、活動の和が大きく広がっていききました。

近い将来、南海トラフ地震など大きな災害を引き起こす日が来ると地震学者が語っています。いつ発生するかわからない災害でも、ペットがいる家庭は一緒に避難を話し合っておく。また行政や地域も一体となって物理的な避難だけでなく、家族を頼りにし一途に寄り添う小さな家族ペットの「こころ」も一緒に避難できる日であるを願っています。

選評

葉山 ほずみ

災害が起きた時にペットと一緒に避難できる施設が行政主体で作ろうという機運が高まっている。災害時はどうしても弱い立場になる飼い犬や飼い猫たち。飼い主としては家族の一員なのだから一緒に避難したい。けれど、非常時にそれを理解してくれる人ばかりではない。ペットと共に避難できる状態を作るといことは人の「こころ」も小さい家族の「こころ」も守ることになる。避難所のプライバシーなど人に対するものはずいぶんと進歩した。この節目の年に震災で弱者となるペットたちの命を守る提言をしてくれたこの作品を震災特別賞に選んだ。

日常ついで。

入 間 しゆか

天気予報が付いていた。本棚の本やテーブルの上にあった調味料、テレビ台にしまつてあつたビデオテープ。それらが散乱するリビングで、ごろんと横倒しになつたテレビが映していた天気予報。記憶と呼ぶにはあまりにも曖昧なもの。

1995年1月17日。私は3歳だつた。震災を記憶している最後の世代。だが、記憶なのか両親から聞かされた話を記憶として残しているのかハッキリしなかつた。天気予報を映していたテレビだつて、その時の様子を親が写真に納めていたから、それを実際に見たかのように記憶しているだけかもしれない。

ただ、暗がりをお気に入り入りのちゃんちゃんこの紐を口にくわえて、母の手を引かれていたことは、私

の記憶と呼んでもいいと確信している。母の手は冷たかつた。何が起きたかもわからず、眠気眼で避難所の中学校まで歩いていった。その時、兄と姉と父がどんな様子だつたのかは憶えていない。

家が崩れた。倒れた筆筒の下敷きになりかけた。丁度、旅行に出かけていて、震災を体験しなかつたけれど、親戚を亡くした。そんなふうになんて震災を振り返るようになったのは、小学校高学年になつてからだつた。ようやく、あの日のことを言語化できるようになったのだ。私は家族も親戚も友達も失わなかつた。運が良かったのだと思う。両親は苦労したのかもしれないが、幼い私にはわからなかつた。

「なんで運が良かったんかな？」

向かいの席に座る聖華ちゃんが声を潜めて言った。私たちは図書室で阪神・淡路大震災についての資料学習をしていた。震災から10年。中学2年生。自分たちの経験を踏まえて震災を調べて、発表することになっていた。聖華ちゃんも私と同じで大きな被害を受けず済んだ家庭だった。

「奇跡、かな。」と私は言ってみる。

「奇跡ってなんか嘘っぽくない？」

「せやな。」確かにそうだ。奇跡という言葉は私たちには途方もない言葉に思えた。

「私らが生きることが奇跡なんよ。」

「そうなんかな。」聖華ちゃんは納得していないようだった。私は保健の授業で習った受精について思い浮かべていた。卵子にたどり着いた精子だけが得られる生命という権利。私がかこいる理由。

悲劇はいくらでも身近にあった。北村くんの祖母は家が倒壊して亡くなった。寺本さんのお姉さんは大怪我をして歩けなくなってしまった。

でも、私や聖華ちゃんには語るべき物語がなかった。運が良かった。ただそれだけだった。調べれば調べるほど悲劇や、それこそ本当に奇跡と呼べそう

な出来事はいくらでもあった。

来週、調べたことをクラスで発表する。私たちは夕方暮れていた。ただ調べただけの発表はしたくないという二人の共通認識があった。だから、できるだけ自分の言葉で自分自身の物語を語りたかった。運が良かったことは素晴らしいことだ。大切な人を亡くさなくて本当に良かった。でも、なんで私たちは運が良かったのか。それを言葉にしたかった。

「日常ってこと。」とふいに聖華ちゃんが言った。

「え？」

「うちらが日常生活をなんの疑問もなく生きてるってことちゃうかな？」

「なにが？」

「奇跡。」

「そうなんかな。」

「たぶん。」

私たちはそれから黙った。何かが形になりそうな気がした。母の冷たい手を思い出した。ちゃんちゃんこの紐をくわえていたことを思い出した。暗い部屋にテレビの天気予報だけが皓々と光っていた。そんな頼りない記憶の先に私はいた。

今も――。

2024年、33歳になった。結局、私と聖華ちゃん
は調べたことだけを發表した。あの日、私たちが
感じた奇跡を言葉には出来なかつた。高校生になつ
て私は地元を離れた。聖華ちゃんとは自然と距離が
できて、それつきりだつた。今彼女がどこで何をし
ているかわからない。いろいろあつた。いろいろあ
つたで片付けるのはあまりにも乱暴だが、いろいろ
あつた。地震は日本中で起きていた。新潟で、東北
で、熊本で、そして、能登半島で。母の手を握つた
3歳の私。記憶と呼ぶにはあまりにも頼りない記憶
を頼りに生きてきた30年という時間。私はこれから
も生きていくのだらう。それが日常つてこと。

佳作

さよなら、またね

石角 直

朝食が終わったら、順次自室に戻って歯を洗って、身支度。リビングに集まるともなく集まり、テレビを観たり、新聞を読んだり、居眠りしたり、思い思いに過ごすのが日課。

今日は滋子さん、珍しくリビングへ顔を出すのが遅かった。しかも少しおめかし。

「あら、お出かけなの？」

仲良しの鈴江さんが声を掛けた。滋子さん、浮かない顔。

「もうすぐ娘を迎えに来るの？」

「いいわね、一緒に行くの？」

頷く。実は滋子さん、他所へ移ることが決まった。娘さんの住む近く、関東の施設へ。けれど認知症のある隣人たちには、事情を説明しづらそう。

午前のお茶の時間、ほっと一息ついたところへ娘さんがやってきた。滋子さんは介護士の助けを借りて、ソファから車椅子へ座り替え、促されるままに玄関口へ向かう。大げさな挨拶もなく、淡々と。一人でもなんとか歩ける鈴江さんと数人が見送りに出る。玄関のホールで、車椅子の押し手が娘さんへと引き継がれた。

「じゃ、行こうか。ありがとうございます」

娘さんがスタッツフらに頭を下げる。滋子さんも倣って、かすかに頭を動かした。

「さよなら、みなさん、お元気で」

「さよなら、またね」

すかさず返したのは鈴江さん、いつになく素早い反応だ。困ったような顔をして、首を傾げる滋子さ

ん。お構いなしに続けて、鈴江さんは言った。

「次はあの世でね」

それが聞こえた人があったのか、なかったのか。ただ滋子さんだけは、それまでの神妙な面持ちをくしゃっと崩し笑顔になって、心持ち顔を上げ、手を振って鈴江さんたちに合図した。

(おわり)

佳作

ビー玉、転がる

増田 優真

私は震災のときには生まれていない。あの地震があったのは三十年前、生まれたのは十六年前だ。十四年前の地震では数百キロ離れた神戸で、それでも怖がっていたらしい。そんな私でも、震災を肌で感じることもある。

幼稚園の頃、ビー玉を転がして遊んでいた。手で転がすのではない。引き戸の溝で転がしていた。ビー玉を置いただけで少しづつ速くなっていき、音が変わっていく。幼稚園児にとっては爽快だったのだろう。

中学生になり例の引き戸に、防音テープを貼ろうとした。私の家はテレビと勉強机が同じ部屋にある。だからよくリビングに「移住」して勉強していた。それでもテレビの音がうるさいから、防音テ

ープを貼ろうというわけだ。

「テープ」といつてもスポンジに両面テープを張り付けたようなものだ。「防音テープ」というよりは「防音スポンジ」と言ったほうが良い。引き戸が当たるところに貼るだけだ。そう思っていたが。

うまく貼れなかった。普通に貼ると、スポンジと引き戸の間に隙間ができてしまう。これでは「防音」の意味がない。幼稚園の頃にビー玉を転がしていたことを思い出した。

「これは地震のときにできたんだ」

やっとなついていた。「普通の家」ならビー玉を溝に置いて、勝手には転がっていかない。地震で家が傾いてしまったから、ビー玉は転がっていくのだから。両親は傾いた家で遊ぶ子供を、どんな思いでみ

ていたのだろうか。

似たような話は、他にもある。

私の高校は、ドアの建付けが悪い。両手でもなかなか動かないこともある。「あの先生は片手でドアを開けた」とちよつとした噂になるほどだ。

その高校に滅災復興学の専門家が来たことがある。その方と先生は仲が良く、休憩時間でも話し込んでいた。笑い声も聞こえてくる。

「うちの高校は建付けが悪いんですよ。あれは地震のせいだと思んですけどね。生徒は何も考えてませんけど」

雑談の流れで何でもないように言うが、私にはやけに重大なことのよう聞こえた。何事にも「理由」はある。ここにも震災は隠れていたようだ。

三十年前の「あの日」、神戸が震災に見舞われ、めちやくちやになったことは、簡単には想像できない。「そんな風になるわけがない」と誰しも思ってしまう。でも、空襲の不発弾が今になっても見つかるように、震災の「跡」は確実に残り続けている。「跡」を見出していき、震災当時のことを想像することが、私たちには求められているのだろう。

佳作

「Soft Wind」

たけだ みさ

「ホンマこの坂きついなあ。やっと学校着いたあ。でも、まだ階段いっぱいある」

僕の住んでいる街は、海と山がすごく近い。東西に細長く、南は海側、北は山側と呼ばれている。

海側の僕の家から駅を過ぎて、山側の高台にある中学校までは坂道を三十分登る。校門からも階段が三か所。四階の三年生の教室まで上がるとクタクタになる。

「やっと教室や」毎日言ってる。

教室はコロナ以降、朝は窓が全開。机の上に置いてあっただろうプリントが、強い風で飛んで落ちていた。

「おはよう。一番乗り」。ここ気持ちいいね」
バサバサ音を立てるカーテンの横から誰かが出て

きた。

誰やねん。ひとりでゆっくりしようと思って、早く登校したのに。

紺ブレを着た人が僕のほうに向かって来た。

「イタツ」

机に脚をぶつけている。なんかおつちよこちよいな感じ。

(背え高)

170センチある僕が見上げた。

「おはようございます」

とりあえず挨拶した。

「今日から、このクラスの担任になった風真(かざま)です。国語が担当だよ。これからよろしく」
クールな見た目ののに、声はふんわり柔らかい。

陽射しで、先生の顔がキラって光った。

ホームルーム。風真先生が一人ひとりの顔をじっくり見ている。

「受験のことも、愚痴でも、何でも聞くよ」

話し方ピリピリしてない、やっぱりふんわりした声。

「今日から卒業までを面白い一年にしよう」

連絡事項が終わって先生が最後に言った。他の先生は、気合入れて勉強頑張れって言うのに。母さんもや。でも、みんな必死で受験勉強してる。面白くなんかできないって思う。

初めての風間先生の授業が始まった。

先生が教科書を読む声はスッと頭に入ってくる。時々話しは脱線するし、雑学も話す。でも、不思議と塾のテストや模試の範囲にはまっていたりする。風間先生の国語の授業は逃さず聞いていたい。好きな教科なんてなかったけど、国語だけは楽しみになった。

前期の模試の結果が出た。国語の点数はかなり良

かった。母さんには国語だけ見せたかった。でも、模試の結果は全教科の点数が一覧表やグラフになっている。だからやっぱり怒られた。一教科だけ嬉しくて、母さんのガミガミは何も覚えていない。

一年生の時は、三学期からコロナで学校での授業がなくなつて、オンラインの自宅学習だけになった。母さんは仕事で僕一人だったから、動画ばかり見る癖がついた。勉強せなつて思えば思うほど勉強が手につかなくなつて、集中力も続かない。成績はどんどん下がるし、勉強の仕方すらわからなくなつたまま、二年生になった。

成績は全然上がらない。僕の通知表を見るたびに母さんは鬼顔になる。勝手に塾に申し込まれて行かされたけど、塾の先生にも塾の勉強にも着いていけなかった。

「ちゃんと勉強してるん」とか、「ちゃんと理解できてるん」とか、母さんは聞く。

(こっちが聞きたいねん)

母さんが怒るので、塾へは仕方なく通つた。

うわの空なもの、集中できないのもわかつてる。

でも、どうやったらいいのかわからなくて、気付い

たら三年生になっていた。

「あっ、イタタッ」

風真先生が教卓でまた脚を打った。

先生の国語の授業は、漢字の起源や意味や興味深く話してくれる。絵みたいな崩れた文字が今の漢字になるまでを黒板に書いてくれるのがとても面白い。僕は漢字のことをもっと知りたくなってきた。

「久しぶりの九十点。頑張ったやん」

中間テストで国語の点数だけは母さんに褒められた。でも、他の教科はやっぱり怒られた。相変わらず集中できないし、授業も面白くない。このままでは駄目だと思って、放課後どうしたらいいか、先生に聞いてみた。

「先生も子供の頃は勉強嫌いだったよ」

「じゃあなんで先生になったん」

先生は、風でバサバサ音を立てるカーテンを掴んだ。

「小学校の修学旅行で漢字ミュージアムに行ったんだけど、そこではまっちゃったんだよ」

中国で生まれた漢字が、日本でどう進化したの

か、日本だけが数種類の文字を使い分けする。そんな日本語のこともっともっと学びたいって思ったんだよねって、先生は言った。

「漢字は音読みしたり、訓読みしたり、いろんな読み方があるよね。ひらがなも、カタカナも元は漢字なんだよ。漢字が熟語になってひらがなやカタカナが組み合わさって文章になる。字体もいろいろあつてすげえよね。僕は日本語の奥深さや歴史に興味を持ってもらいたくて国語の先生になったんだよ」

先生の声のトーンが撥ね上がった。

「僕も国語にはまりそうやけど、他の教科は全然だめ。家ではつい動画を見てしまうねん。どうやったら先生みたいに勉強できるかな」

先生の目をじっと見た。

「国語が好きになってくれて嬉しいな。勉強は文字の読み書きから始まるからね。国語が好きになったら、他の教科もきつと大丈夫だよ。苦手な教科は、とりあえず薄い問題集からやってみようか。ゲーム感覚ならできるよね」

国語だけじゃなく、先生が他の教科も見えてくれるって言った。

先生は僕にわかるように教えてくれる。だから、

薄い問題集を一冊やり切れた。

一学期の通知表の国語は「5」になった。
他の教科も少し上がった。僕は勉強が嫌じゃなくなってきた。

久しぶりに母さんが褒めてくれた。

「すごいやん」

もっとやってみようって思った。

三者懇談で僕が行きたかった公立高校は無理だとわかった。僕に向いている私立高校を先生が勧めてくれて、専願で受けることにした。専願の科目は三教科。だけどやっぱり少し頑張らなあかん。でも、気持ちちはちよつと楽になった。

夏休みの間も風真先生に勉強を見てもらっている。先生は嫌な顔しないで僕にわかりやすく説明してくれる。

僕は先生に聞いてみた。

「僕に教えるの面倒じゃないん」

「楽しいですよ。わからないって悩んでる子の顔が、理解した途端にパーッと晴れる。そんな瞬間が大好きなんです」

そう言っている先生の顔も光った。

先生と一緒にやったら、他の教科も頑張れる気がしてきた。

「僕、国語の先生になる」

先生に言ってしまった。

先生は立ち上がって窓際に行った。

舞い上がったカーテンの側で、やっぱり、ふわつと笑った。

佳作

八十五歳の御褒美

清水久子

八月二十七日家の廊下で転倒救急車ですずらん病院へ入院 九月二日足のつけ根の骨折手術 リハビリ出来なく十月二日しあわせ村のリハビリ病院へ移る 本格的リハビリの開始午前午後一日に一時間四十分余り 月金は風呂 有馬温泉と同じ銀泉 最初はリフトでつかる 化粧水なくても すべすべの肌 上げ善据え膳主婦にとっては極楽生活 家は地獄 主人は九十歳認知症 息子と二人 デーサービスへ夫婦で月水金と午後だけ行つたので何とか行つてもらえる様に 朝昼夕電話しながらデーサービスへも電話でお願い 子供三人土日は次女が来て木曜日は長女 息子はその間娘の助けを借りながら世話してくれる 一ヶ月後長女が風呂で足の甲を骨折手術して又相当かゝりそう松葉杖で歩く 右足だけか

ら運転出来ず主人が会社が引けて 加古川から送迎して一泊することもあり…… 十一月半ばになつても帰れなく そんな時に義弟の訃報 息子と次女が代理で参加 家族犠牲にして申訳ないといひ口にする と 看護師さんが八十五年間一生懸命生きてくれたのですから御褒美ですよ そう思つてゆつくりしていつて下さい その言葉にハッと温かさを感じ 人生を振り返ることが出来た 従妹に電話すると三人の子育てして義母の世話して往生させた この際子供に恩返しさせて何も気にせずゆつくりしたらいい! 弾き返す様に笑わせてくれた 七十人の理学療法士さんと会話しながらリハビリ 自立の退院歩いて帰る 認知症二つ折れで歩く二人の散歩 人生はこんなものかとあきらめていたがまだく二人幸

を味わって主人を見送る使命がある。人生の大きな
節目を感じ充実した終活のため勇気づけられた病院
の皆様に感謝し。余生の夜明けに夢ふくらませて
無知な自主トレでりハビリ遅れ先生に迷惑かけたこ
ともあったが成長の課程として思う一齣として笑え
ます様に。入院生活四ヶ月

総評

西村恭子

「こうべ市民文芸」は隔年ごとに作品募集を行ってきたが、コロナ禍等の休止期間5年を経て再開となった。

空いた時間のせいかは不明だが、応募総数は以前より少なかった。それでも震災から30年という節目に届いた各作品は、それらにまつわる体験や思い、いのちを見つめる物語が多かったように思う。

葉山ほずみ選者とは初めての選考となったが、上位4作品は全て合していた。どの作品も当然選ばれた作品に仕上がっていた。特に「夜明け前」は他を押し、30年を経て来たからこそ今年へ、なよりの鎮魂と未来を想う物語に仕上がって一席に座った。

入選8編、佳作5編、その中で震災を描いた作品が5編に及んだのも今年の特徴だろう。選評は各々に記すとして、作品として入選ラインにありながら、視点を外した1行や、意識出来ない言い回しの多様、文章の癖などによって選に洩れた作品があったことは残念に思う。「熱を持って、冷静に書く」、かつて自身に言われた言葉を思い返す。

総評

葉山ほずみ

今年は阪神淡路大震災から三十年という節目の年ということもあり、応募された作品は「震災」や「いのち」に関連したものが多くあった。神戸という街を描いた作品も多かった。震災前の風景も新しく歩き出した震災後の風景もあった。どれも目に浮かぶような作品だったと思う。それぞれの書き手たちの中に1995年1月17日という日が静かに横たわり続けている。震災から神戸の街が復興し続けているように、人々が受けた傷にもかさぶたができ、その下は癒えたように見えるのかもしれない。けれど、受けた傷自体の深さは変わらないのではないかと感じた。

第一席の『夜明け前』は今年選ばれることに意味があった作品だったと思う。タイトルの『夜明け前』は三十年という月日を経て、神戸という街がようやく掴んだ『今』ではないだろうか。神戸に暮らす人や働く人々が三十年という長い時間をかけてようやく夜明け前までできたのかもしれない。

それ以外には介護や人生、命に関する作品が多くあった。文学は時代を映し出す。現代が抱えている問題や人々が内包することが強く描かれていたように思う。

第40回こうべ市民文芸
(統 計)

部 門	応募作品数 (点)	応募者数 (人)
詩	323	121
短 歌	388	138
俳 句	269	97
川 柳	116	116
短編・エッセイ	35	35
合 計	1131	507

市民の文芸活動の発表の場として、昭和48年に「ともづな」として創刊。平成4年に「ことうべ市民文芸」として生まれ変わり、平成16年からは隔年開催となつて、今回40回目を迎えました。

今回も広く市内全域及びその近隣からの応募があり、延べ507人、1131点の応募をいただきました。

今回は、震災から30年という節目を迎えるため、震災関連特別賞という今までにない賞を設けました。応募作品の中には、震災を経験した方は実体験を、震災後に生まれた方は伝え聞いた話などを元にしたものが数多くありました。

震災によつて神戸の街は大きな被害を受けましたが、現在、都心三宮再整備などの取り組みにより、大きく街が変わろうとしています。そのような中でこのことうべ市民文芸が、変わらない人の想い、変わっていく人の想いを発表できる場になればと願っています。

本誌には各部門の選考委員の審査を経て最終選考に残つた65作品を掲載しております。本誌の刊行にあたりまして、応募作品の選考と講評をいただきました審査員の先生方に厚くお礼申し上げます。

第40回 こうべ市民文芸 入選作品集 令和6年度

令和7年3月発行

編集・発行 神戸市文化スポーツ局文化交流課

〒650-8570

神戸市中央区加納町6-5-1

☎(078)32216490